

平成 19 年度 卒業論文

近年の若年層におけるナショナリズムの高揚

関 明愛

山形大学教育学部

学校教育教員養成課程 教科教育コース 社会科教育専攻

目次

| | |
|---------------------------------|----|
| 第1章 本論文の課題と構成..... | 1 |
| 第2章 日本におけるナショナリズムの歴史の変遷..... | 3 |
| 2.1. ナショナリズムについて..... | 3 |
| 2.2. 戦前のナショナリズム..... | 4 |
| 2.3. 戦後のナショナリズムのありかた..... | 6 |
| 2.4. 近年のナショナリズムの変化..... | 10 |
| 第3章 仮説と研究方法..... | 15 |
| 3.1. ナショナリズムに影響を与えている要因と仮説..... | 15 |
| 3.2. 研究の方法と意義..... | 18 |
| 3.3. 調査の概要と分析に使用する変数..... | 19 |
| 第4章 データの分析..... | 21 |
| 4.1. 歴史観に影響を与える要因について..... | 21 |
| 4.2. 性別からみる違いについて..... | 25 |
| 4.3. 影響の方向性について..... | 31 |
| 第5章 まとめと今後の課題..... | 37 |
| 5.1. 分析の考察..... | 37 |
| 5.2. 今後の課題..... | 39 |
| 付録..... | 41 |
| 調査票..... | 41 |
| 単純集計表..... | 52 |
| 文献..... | 65 |

第1章 本論文の課題と構成

近年、日本においてナショナリズムについて関心が高まっている。「国歌及び国旗に関する法律」（平成十一年八月十三日法律第百二十七号）の施行、新しい歴史教科書をつくる会による扶桑社の歴史教科書、2002年に第7次の改訂が行われた学習指導要領に「国を愛する心情」の育成が明記されるなどが近年取り上げられ、激しく議論されてきた。たとえば、「国歌及び国旗に関する法律」については東京都の教育現場における国旗掲揚・国歌斉唱に関する職務命令違反で「二〇〇四年までに約二百五十人の教職員が処分」（高橋 2004：144）され混乱を生じさせ、その是非を問われている。扶桑社の歴史教科書については「二〇〇一年の春に扶桑社版の歴史教科書が文科省の教科書検定に合格し、学校でも採択されるかめぐって、韓国などとの間で外交問題にすらなった」（高橋 2004：198）ことであり、つくる会側は「戦後日本の歴史教育は、自国の過去の歴史の負の側面を強調するだけの『自虐史観』であって克服されるべきもの」（高橋 2004：198）との見解に立ち、それに反対する側は「自国及び自国中心の歴史観によって貫かれていて、特に近現代史の部分では、過去の日本の侵略戦争や植民地支配を正当化する強い傾向がある」（高橋 2004：199）として反論している。

ナショナリズムは戦後危険な思想の一つであると考えられてきた。第二次世界大戦において敗北し大きな被害を受けたため、その反省から平和主義を貫くために戦争を放棄したためであり、その戦争の要因の一つにナショナリズムがあると考えられたためである。ただし、ナショナリズムという言葉は非常に多義的であり、すべてのナショナリズムが完全に否定されてきたとは言い切れない。また、すべてのナショナリズムが排除の対象になっていたのかということも慎重に見極める必要がある。

ナショナリズムの研究は社会学の重要なテーマである。特にメディアとの関係が特筆される。メディアという言葉は大きく分けて3つの意味で使われる。1つは新聞、雑誌、ラジオ、テレビなどの主要な大衆に向けた情報伝達の媒体である「マス・メディア」、2つめにはより広義に人間と人間の相互行為を媒介する言葉や文字、書物、電話、写真、映画、インターネットなどの「コミュニケーション・メディア」、最後にカナダのメディア研究者マクルーハン（McLuhan 1964=1987）が定義した、さらに広義に人間と物理的対象を含む対象一般の間に立ち、それらの対象について経験を媒体する「テクノロジー」をさして用いられる場合がある。これらを与えるナショナリズムへの影響は社会学で長い間議論されてきた。

また、教育とナショナリズムとの関係も非常に重要視されている。国民国家の成立には国民や国家というナショナルなものが不可欠だからである。そのナショナリズムは国家の教

第1章 本論文の課題と構成

育で成熟されてきた側面が大きい。そのために、ナショナリズムの変化は歴史教科書で生じた問題や国旗・国歌の制定によって上記のように教育の場で顕著に影響を与えている。

このように、ナショナリズムとメディアの関係性については社会学の長年のテーマであり、また、近年のナショナリズムの変化を前にして過去の分析の流れの中で現在のナショナリズムが何であるのか、またナショナリズムに変化を与えた要因が何であるのかを調べようと思ったのがこの研究のきっかけである。

本論文では第2章で先行研究によるナショナリズムの歴史的変遷のまとめを述べる。次いで第3章では先行研究から導き出される仮説と分析の概要を述べる。第4章では実際に分析をおこない仮説の検証をする。最後に第5章で分析のまとめとそこから導き出される今後のナショナリズムの動向と、今後の研究の課題を述べる。

第2章 日本におけるナショナリズムの歴史的変遷

ここでは、まずナショナリズムの概要とそれに基づく戦前の日本のナショナリズムの概要を『社会学』（長谷川ほか 2007）を中心に用いて 2.1. でまとめ、その後に戦後のナショナリズムと近年のナショナリズムについての先行研究のまとめを述べる。

2.1. ナショナリズムについて

ネーションやナショナリズムの起源について、1970年代までは国家は超歴史的なものとして自明視ないし絶対視してきたが、それ以降は近代以降の産物であって、それらを歴史一般や文化一般へと拡張していくことはできないとされ社会学や歴史学において重要な論争点となる。ネーションやナショナリズムに対する近代主義的見方と要約される視点は次のようないくつかの下位類型を持つ。

第1に、「中心」部諸国（西欧）による経済的搾取へと対抗する「周辺」部諸国エリート層が幅広い民衆を政治的組織体へと動員しようとする中でネーション的なるものが形成されてきたという過程を I. ウォーラーステインは世界システム論で強調している（Wallerstein 1983=1985）。

第2に、B. アンダーソンは人々がネーションの一員としての意識を持ち、自分自身の存在とネーション（=共同体）の運命とを一体のものとして考えるようになるためには、人々がネーションのことを「同質的な時間と同一の空間を供しながらともに進む共同体」として「想像すること」が可能でなければならず、それを可能にしたのは新聞や小説といった印刷された言葉の大衆への普及であったとした。この「想像された共同体」がネーションであるとした（Anderson 1991=1997）。

第3に、E. ゲルナーによれば、産業社会における生産活動の持続を可能にするためには読み書き能力に基礎をおく高次の文化を成員誰もが共有し人々はつねに流動的に代替可能であることが求められる。それには、教育制度が必要であるがコストの面でそれを可能にする制度は国家であり、産業化に適合的な原理としてナショナリズム（政治的単位と民族的・文化的単位が一致すべきだという原理）が選択されたというものである。その結果としてネーションが世界的に一般化したとする（Gellner 1983=2000）。

2.2. 戦前のナショナリズム

日本における近代のナショナリズムの始まりは明治維新以降であるといえるだろう。それまでの日本は、国家として日本が存在するわけではなかった。それは日本に住む住民が自分は日本人であるという明確な国民意識を持っているわけではなかったからである。当時の日本は身分、階級が確立されており、しかも日本という国家があるわけではなく、300ほどの藩によって統治されその中心に江戸幕府があっただけである。つまり、現在の日本の本州、北海道、四国、九州を300ほどの国が分割して支配していたといってもいい。さらに、領民はあくまでも国民ではなく領主が治める人間以上のものではなく、身分制度に基づいた体制のため近代的ナショナリズムは存在しえない。政治にも軍事にも領民はかわる義務はなく、領民が藩を守る義務が存在しないからである。たとえば、フランス革命以前のフランスでは、国政は宗教関係者の第一身分、貴族である第二身分に握られており平民である第三身分は政治にかかわることができなかった。そのために第一身分、第二身分が特権を握る形となり不公平な社会制度が出来上がっている。第一身分、第二身分の間に大きな格差があるために第三身分はこのような国家体制を妥当するために革命を起こしたのである。ここから見えることは身分制度によって国民の区分がはっきりと分けられ、とくに平民は政治に責任を持たないために身分を越えて同じフランス人であるという共通の意識を持たない。そのために国内紛争が起きたのである。逆に革命によって身分制度が崩れ、かつての平民も国政に参加し兵役の義務を負ったためにフランス人という共通の意識が生まれ国民国家として成立したのである。幕府が崩壊するまで日本には日本人が存在せず、領民も国民ではないのである。このことについては、小熊英二（2002）が端的にまとめている。

封建体制にあっては、人間は士農工商という身分と、藩という地域によって分断されている。そこには薩摩の武士や水戸の農民という意識はあっても、身分や地方をこえた「国民」という意識がない。武士の忠誠対象も、「日本」ではなく藩主であり、それぞれの藩の利害を考えるにすぎない。（小熊 2002：78）

しかし、これは欧米列強の進出によって崩されることになる。はじめのうちは外国の進出を阻み従来の鎖国政策と政体を守ることにしたが、薩英戦争や四国戦争などの武力衝突によって薩摩藩や長州藩といった討幕派諸藩は欧米列強の力が強大であることを感じるとそれまでの統治単位である藩で対応することは不可能であるとわかる。これは、封建制が総力戦にまったく不向きであることに原因がある。そのため、欧米のように日本は日本としてまとめ、近代化を成し遂げることで欧米列強の進出に対抗することを目指す。それまで日本としてまとまっておらず、またたとえ自分たちの住んでいる地域が藩から日本となっても日本国民であるという意識のない人間に上記のような概念を持ってもらうために

新たに成立した明治政府が打ち出したのが近代的なナショナリズムを日本に住む人々に教育する政策であった。

まず、日本という国家の立ち上げにおいてネーションの創出という文化的過程を経なければならぬ。

そこで、日本人という存在の共通の起源として活用されたのが天皇である。それまで民衆にとっては領主が自分たちの支配者であったが、さらにそれらを統合する存在として古くから存在していた天皇家という伝統的な權威によって日本人という共同体の正当性を確立したのである。そのために、明治政府は短期間に天皇を全国に巡幸させその存在を知らしめるとともに、国家化された神道や教育などによってその正当性を確立したのである。このことについて、姜尚中（2001）は伊藤博文を最大の功労者として以下のように伊藤の課題を説明している。

幕藩体制解体後に出現した「恐るべき政治的原始状態」（自由民権運動！）を掣肘する制度的保証として国権の強化・拡大をつくり出すことであったが、同時に「国民的統合の創出」こそがもっとも重要な課題として意識されていた。それはいかにして「国家の基軸」を創造し、それを求心力として国民を創出するのか、という問題であった。（姜 2001：57）

これを課題としその答えを天皇に求めたのだが、その役割について以下のように述べている。

伊藤にとって、「政治的実効性を欠如した伝統はほとんど無意味なもの」だったのである。したがって、「国家の基軸」となるのは、「自然的・伝統的天皇」とは異なる「超越的統治者」としての天皇の創出でなければならなかった。（姜 2001：58）

しかし、このことが大日本帝国憲法に矛盾をもたらすことになるとも説明している。

憲法の〈外〉にあつてそれを最終的に根拠づける絶対的な存在としての天皇と、憲法体系の影響を受け、いわばその〈内部〉に組み込まれる立憲君主としての天皇、この矛盾が否応なく憲法の、したがって「国体」のきしみとなって露見されかねなかったのである。（姜 2001：58）

つまり、強力な国家権力の確立と国民国家の成立を両立させるためには、国家権力を擁護するための絶対君主という側面と、国民国家成立ための国民統合の象徴という憲法で規定された立憲君主という側面という二面性を天皇に持たせる以外にはなく、そのために矛盾をもった存在が明治時代の天皇ということである。この矛盾がもっとも表面化したのは、つまり『国体』の神がかり的な『非宗教的宗教』と化したのは、1930年代の戦時期である

第2章 日本におけるナショナリズムの歴史的変遷

(姜 2001 : 74) といえる。これについては、欧米諸国と日本の事情の違いがあると考えられる。つまり、欧米諸国にはキリスト教という強力な一神教が国民統合の象徴と権力への権威付けを行っているということである。これに対して、日本には強力な宗教が存在していない。明治以前から日本に存在している神道も仏教も多神教であり、キリスト教の聖書のような絶対の聖典もない。日本においては天皇の家系が形式的には支配してきたために、他の国民統合の象徴となる存在も権力への権威付けを行う存在もなかったのである。つまり、天皇に欧米諸国でのキリスト教の果たす役割を担わせなければならないということになる。そのために、戦時期のように天皇を中心とする国家体制を「非宗教的宗教」と見なしてしまうことになったのだろうと考えられる。そして、そのようなナショナリズムが戦争を遂行する上で利用されたのである。

次に、人々が実際にその振る舞いと意識を変えていく過程では、多くの「同時性の体験」が積み重ねられていく。それが、学校、工場、軍隊である。階層や出身地が異なる者が集められ、統一された時間、共通の言語や共同の飲食習慣という、同じ場所で同じことを一緒にする体験が全国的に用意され、その中で人々は国家を感じ、国民となるのである。

最後に、ネーションは境界を設定し、その内側に向かって均質化された内部を形作る。しかし、現実には日本にはアイヌ人や琉球人など、文化的に異なる集団を内包していた。さらに、日清戦争で台湾人、朝鮮併合で朝鮮人を内包することになる。これに対し、日本政府は同化政策によって文化的に日本へと同化することをめざすことになる。

ここで注意しなければならないのは、このときにはまだ民族という概念が一般ではなかったということである。民族という概念が一般化したのは、第一次世界大戦後の1918年にアメリカ大統領ウッドロウ・ウィルソンが提唱した民族自決の十四か条の平和原則のなかで提唱してからである。そのため、朝鮮半島では朝鮮人の独立を目指し1919年に三・一独立運動が展開されることになる。また、日本では欧米列強の植民地である東南アジアの独立を支援するという、第二次世界大戦での東南アジア進出の口実となった。

2.3. 戦後のナショナリズムのありかた

第二次世界大戦の折、日本は連合国に敗れ戦後しばらく GHQ（連合国最高司令官総司令部）の占領政策を受け入れることになる。そのことは阿部潔が次のように述べている。

非ファシズム化を掲げた占領政策において、日本の伝統的な文化や芸能はことごとく禁止や規制の対象になった。(中略)日本社会の近代化を目指すうえで、「日本らしさ」に代表される伝統的価値観は、封建主義的で反民主的なものとして否定されたのである。(阿部 2001 : 44-5)

日本を占領した連合国、そして実際の統治機関である GHQ は日本的な伝統を奪うことで「軍国主義帝国」から「民主主義国家」へと転換させようとした。また、その政策をうけ

て日本的な伝統を奪われた民衆はどうしたかという点、「『民主主義』を積極的に歓迎する『下から』の人々の動き」（阿部 2001：45）があったために受け入れられたのである。その理由を渡辺治は次のように述べている。

ナショナリズムによって国民を動員して遂行したアジア太平洋戦争の悲惨な国民的体験が、ナショナリズム全般と国家への不信を大衆的な規模で成立させたからである。（渡辺 2006：18）

これは確かに説得力がある。それまで信じていた国家と従来のナショナリズムにこれ以上ないほど裏切られたのである。戦争に敗北し、都市は焼け野原となり産業も資源もない状態では日本人として誇れることは何もない。戦後間もないころには国家や従来のナショナリズムを信頼できないということは当然考えられることである。逆に、誇れなくなってしまった日本を変えようとしている連合国に期待を寄せ、占領政策を受け入れたのである。特に、国体ナショナリズムが排除された。このナショナリズムは戦時期に顕著にみられた天皇制を中心とする国家体制を「非宗教的宗教」としてとらえるものであると考えられる。

また、文化や伝統といったものもこの時代には自ら否定することになった。たとえば、ルース・ベネディクトの『菊と刀』に対する当時の日本人の反応から見る事ができる。『菊と刀』が基本的にニュートラル(中立的)な学問的著作」（浅羽 2004：220）であるはずが、この『菊と刀』の中で語られる集団主義や恥の文化は「日本の『近代化』の遅れ」（浅羽 2004：220）であると非常に自虐的に解釈しているのである。

この時代の日本では、政治経済軍事、そして文化という全てにおいて自信の持てない時代であったといえる。しかし、阿部はナショナリズムが完全に消え去ったわけではないと指摘している。

「日本」の復興を目指す戦後社会は、戦前とは異なる新たな「ナショナルなもの」を必要とした。そうしたものを欠いては、「国家の再建」も「日本の復興」も国民に対して訴えかける力を持ちえなかったであろう。（阿部 2001：49）

と、ナショナリズムが必要であった理由を述べてさらに続けている。

だが、政治的な次元において「ナショナルなもの」を肯定することは反動的として敬遠された。（中略）それゆえ「ナショナルなもの」それ自体は、一見したところ政治とは無縁の次元において、新たなかたちで唱えられることになった。それは「科学・技術立国」という理念にはかならない。（阿部 2001：49）

つまり、戦争とは直接関係のない形でのナショナリズムの喚起をはかったということである。「科学・技術立国」という理念は政治とは無縁ではあるが、実際にこれを目指して日

第2章 日本におけるナショナリズムの歴史的変遷

本国民は一つにまとまり、高度経済成長を経て世界第二位の経済大国にまで到達したのである。「科学・技術立国」になるという目標で国民は団結し、「科学・技術立国」に所属している国民であるということが日本人の誇りとなったのである。これは新しい形のナショナリズムであり、〈経済的なナショナリズム〉ということができるだろう。

また、小熊（2002）は「戦後」には二つの意味があり、それぞれでナショナリズムも変化しているという。小熊は国民総生産が戦前水準に回復した1955年を境目にして、それより以前を「第一の戦後」、それ以降を「第二の戦後」と定義している。『第一の戦後』は日本がアジアの『後進国』として、『第二の戦後』では西洋なみの『先進国』としてかたられていたのではないかと（小熊 2002：12）としている。そして、この二つの「戦後」では民主主義のとらえ方が以下のように変化しているとしている。

貧困と改革の時代だった「第一の戦後」では「民主主義」や「平等」といった言葉が、「横ならび主義」などとはほど遠い響きをもって語られていた局面があったということ。そして、秩序が安定した「第二の戦後」では、「民主主義」をはじめとした「第一の戦後」の言葉がかつての響きを失い、敗戦直後の心情が「一時的な『気の迷い』」とみなされていったことである。（小熊 2002：13）

ここでいう、「横ならび主義」などとはほど遠い響きを持って語られる、というのは「これからは大学出だからどうのこうのというような時代ではないんだよ。実力の時代だよ。民主主義の世の中だ。みんなは平等なんだ」（小熊 2002：13）というような実力主義であり実力がある人間には「平等」に対価を得ることができるかと捉えることができる。そして、この考えは「第二の戦後」によって否定される。このことから小熊は『第一の戦後』においては、『国家』や『民族』といった言葉も、『第二の戦後』とは異なる響きを持って語られていたのではないかと（小熊 2002：14）と論じている。

このことをさらに詳しく見てみる。小熊は、「第一の戦後」では戦争体験が非常に大きな影響を与え、それが戦後民主主義の基盤になったとしている。ここでいう戦争体験とは、モラルに関するものであるとしている。たとえば、戦時中に戦争に協力したインテリ層については、

文壇や論壇内で誰かが自分を憎悪していれば、たとえ官庁や軍の特定部局内と結びついていても、いつどこに密告されるか予想不可能な時代だった。戦後になって、戦争協力を行ったはずの知識人たちが、自分は弾圧された経験があると語ったのは、あながち虚偽ではなく、こうした事情が背景にあったのである。（小熊 2002：49）

と戦争に協力させられた背景をとらえ、「しばしば屈辱感と自己嫌悪なしには回想できない」（小熊 2002：50）というものである。

また、学徒兵における戦争体験については、「学徒兵たちが入営後に直面したのは、理念や理想などとはまったく無縁の、不合理極まりない生活だった」（小熊 2002：50）という戦争体験を挙げている。これは、「大衆性に対する本能的嫌悪と国軍の非科学的組織に対する不満」（小熊 2002：50）という言葉に集約できる。「大衆性に対する本能的嫌悪」は都市と農村、上層と下層の知的階層格差を前提とした都市出身者と農村出身者の対立、そして「非科学的組織に対する不満」は非合理的な精神主義と上官の無責任への疑問が原因となっている。都市出身者と農村出身者の対立については疎開という形でもその姿を表している。他にも、軍需工場や隣組や町内会などの公認組織での物資の横流しや横領や虚偽などがある。「統制が強められれば強められるほど、秘密主義、セクショナリズム、形式主義、非能率など、官僚組織がもつ弊害は、社会のあらゆる領域におよび、戦争体制の活動をも麻痺させてしまった」（小熊 2002：39-40）という矛盾に対する疑問を一般の国民も持っていた。このような事態をもたらしたのは戦前戦中の日本の政府や軍にあったセクショナリズムと無責任体質にあるとしている。以上のような弊害を解決するために「第一の戦後」での民主主義は成立したのである。つまり、「統制の撤廃や言論の自由化」は「総力戦の思想の延長」（小熊 2002：68）であるということである。これは、「占領軍の司令開始以前から出現していた。『戦後民主主義』は、アメリカから『輸入』される以前に、総力戦の思想の延長上に発生していたのである」（小熊 2002：69）としている。そして、この時期の戦後思想の特徴は『民主』と『愛国』の共存状態（小熊 2002：803）であるとしている。

しかし、この「第一の戦後」の民主主義は戦争体験に依拠していたために、これが風化したり戦争体験を持たない世代が多くなっていくと上記のような思想に変化が訪れることになる。その時期が「第二の戦後」となる。この「第二の戦後」で成人した世代では戦争について「戦死者の存在は彼らにとっては『三百万』といった抽象的な数字になりがちであった。そして、『加害』といえ、『日本』や『日本人』という国家や民族が、侵略戦争を行ったというレベルになってしまいやすかった」（小熊 2002：803）という状態になったのである。そのなかで、「被害の記憶が抽象化され風化しつつあった状況では、個人の人格を崩壊させるほどの傷として提起できるものは加害の記憶しかない」（小熊 2002：802）という状態であり、「全共闘運動の一部学生たちが、侵略戦争の加害の責任を軽視する『戦後平和主義』の『欺瞞』を批判」（小熊 2002：803）することになり、やがて『戦後民主主義』といえ『近代主義』であり、『市民主義』であり『護憲』であるといったイメージが、一九六〇年代（中略）『発明』されてゆく」（小熊 2002：804）のである。おそらく、一般に「戦後民主主義」として認識され、そして現代において批判の対象になっているのはこちらの意味合いのものに近いものだろう。

以上をまとめると、戦後日本はナショナリズムを捨てたかのように扱われたが、実はナショナリズムを失っていたのは極めて短い時間である。あるいは、戦前戦中のナショナリズムへの批判と回答という形で、「民主」と「愛国」が共存した形での戦後思想が「戦後民主主義」というナショナリズムとして成立していた。それ以降、「加害の記憶」を重視した「戦後民主主義」へと変質し、戦争に通じず「加害の記憶」を再び作り出さないが国民

が統合するナショナリズムが求められたために〈経済的なナショナリズム〉が成立したとまとめることができる。つまり、非常にわかりにくい形ではあるがナショナリズムは存在していたのである。

2.4. 近年のナショナリズムの変化

近年のナショナリズムについて先行研究を見てみると、漫画家である小林よしのりについての言及を多く見ることができる。阿部潔は小林の『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL 台湾論』(小林 2000)での記述を用いて「こうした小林の語り口は日本による過去の植民地化政策を肯定するものである」(阿部 2001:209)としている。また、他に浅羽通明は小林の『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論 3』(小林 2003)は大東亜戦争について「日本を抑圧民族解放だと近代化だとかいう、高い理念へ仕えたことをもって、名誉ある国とする積極的ナショナリズム」(浅羽 2004: 273)に加えて「黒船以来の欧米文化の侵攻に抗した日本近代の歩みは、『伝統』を自衛する戦いとして肯定される」(浅羽 2004: 274)という防衛的ナショナリズムを持っているとしている。つまり、小林は大東亜戦争時の日本の行動について、日本は間違ったことをしているわけではなく、むしろ過去の戦争についてもっと誇りを持っていいとしている。終戦後の日本は戦争への反省から始まっており、その歴史的な経緯からみると小林の意見は異質なものであり、またその異質な意見への反響が大きくある程度受け入れられているからこそ、一介の漫画家である小林を取り上げているのだろう。

また、小林と同じように過去の戦争を見直すという視点から書かれたものに扶桑社の歴史教科書がある。安丸良夫はこの教科書の全体の内容を「歴史の回顧が現代日本の現状肯定に帰結し、そこからまた将来の課題を導き出すナショナリズム史観」(安丸 2006: 45)とした上で、とくに大東亜戦争の記述については以下のようにまとめている。

日中戦争も太平洋戦争も日本はむしろ被害者でやむをえず戦争をはじめたということになり、軍部の独走や超国家主義や日本軍の加害責任が問われる余地はほとんどないことになってしまう。(安丸 2006: 50)

小林も扶桑社の歴史教科書も大東亜戦争について見直しをおこなうことで現在の歴史観とは異なる結論を導き出し、それを今後の歴史観に結びつけようとする点で同じであると見ることができる。つまり、戦後は経済的なナショナリズムが主流であったものが、近年では〈歴史修正主義的なナショナリズム〉が興隆してきているということができるだろう。歴史修正主義ではなく、〈歴史修正主義的なナショナリズム〉としたのは、このナショナリズムは歴史分野だけにとどまるわけではなく、それを元にした現代の事象も広範に批評の対象にしているからである。また、小林以外では山野車輪の『マンガ嫌韓流』(山野 2005)が挙げられる。これは主に日本と韓国間の歴史問題や領土問題を取り扱ったものであり、

シリーズ化し、2002年2月22日に第二部である『マンガ嫌韓流2』（山野 2006）を出版している。2007年8月28日時点で第一部・第二部の累計で78万部を出荷したと晋遊舎は発表している（2007年8月28日時点でのJ-CASTの報道による）。また、同日第三部である『マンガ嫌韓流3』（山野 2007）を出版している。このことに関連して高原基彰（2006）は『嫌韓・嫌中』という言葉がある。韓国や中国に対する、漠然とした反感の総称である」（高原 2006：10）と説明したうえで、『2ちゃんねる』を頂点とするインターネット上で韓国・中国に対する罵詈雑言が繰り返される光景は、まったく珍しいものではなくなった」（高原 2006：10）とその見解を示している。

ナショナリズムが高揚してきているという風潮について、阿部は他者からの承認が得られないからであるというように分析している。阿部(2001)は「他者」への同一化によって生み出されるアイデンティティは「他者」からの承認を得ることではじめて安定化すると述べた上で、戦後日本は一貫してアメリカからの承認を求めているとしている。『アメリカからの承認』は自己アイデンティティを確立するうえでなくてはならない条件」（阿部 2001：84）であったが、そのアメリカは日本の求めるような承認を行う意思がもともと存在していないとしている。

第二次世界大戦後、冷戦対立下での軍事的・政治的・経済的状況から判断して、アメリカは日本を友／仲間／パートナーとして迎え入れた。だがそこには、「アメリカを超えてはならない」との不文律があった。（阿部 2001：88）

さらに、「アメリカとは根本的に異なる『特殊な日本』への激しいバッシング」（阿部 2001：88）によってアメリカからの承認が実現できない結果に、「九〇年代の日本における『自己＝ナショナル』なものを追い求める動きの高まり」（阿部 2001：94）となってあらわれたのであるとしている。また、90年代のグローバル化の中でアイデンティティの確立がより求められたということにも言及している。

実際には、国際化／グローバル化が進めば進むほど、同時に「ナショナルなもの」への関心やこだわりも高まっていく。なぜなら「世界」という他者に会うことではじめて、人々は「日本」という自己を意識化するからである。（阿部 2001：38）

90年代から加速したグローバル化によって自己の存在を定義することが求められる上に、他者からの承認、特に日本が求めていたアメリカからの承認を求めることができない。そのため自分たちの望む自己のあり方が外部から認められないために、自分たちでそれを満たすためにナショナリズムという手段を用いたということである。

他の見方としては、北田暁大（2005）はアイロニズムがその根底にあるとしている。北田は近年のマス・メディアのお笑い番組、バラエティ番組が素人の振舞いを前面に出して視聴者がツッコみの位置＝対象を嗤うポジションに立てるようなものに変遷することで、

第2章 日本におけるナショナリズムの歴史的変遷

アイロニカルであるということ（嗤いの感性を持つこと）がテレビ視聴のために必要な基本的条件となったとしている。それを前提として、インターネット掲示板「2ちゃんねる」において展開されているナショナリズムについて以下のように分析している。

はじめはマスコミの建前（形式）／実態（内容）のずれに照準した批判であったものが、やがてアイロニー的コミュニケーションの継続を目的化するようになり、形式／内容の差異を無理やりにでも読み込もうとする陰謀論的態度に帰着してしまう——これが2ちゃんねるに跋扈する「ウヨ厨（むやみに右翼的な書き込みをする「厨房＝中学生の坊主のようにガキっぽい書き込みをする人びと）」たちの姿である。（北田 2005 : 209）

さらに、以下のように結論付けている。

たとえば、2ちゃんねるに象徴的に現れているように、現在では、「建前」的理念・思想を振りかざし、自らを「標準」と信じて疑わない（とされる）「戦後民主主義」「左翼」「マスコミ」が標的とされ、その対抗機軸＝ロマン的対象として「ナショナリズム」「保守」が呼び出されているわけだが、もちろんそれは偶然的な選択であって、「思想なき思想」は場合によっては「保守」的な価値観を否認することもいとわない。（北田 2005 : 218）

阿部がアイデンティティの確立という観点から、ナショナリズムが興隆していることは事実であり、必然的なことであるという立場であるのに対し、北田はアイロニズムの浸透によって生じたナショナリズムはロマンの対象を求めているのに過ぎないとしているということに違いがある。阿部は近年のナショナリズムの高揚は日本人全体が求めた結果であるとしているのに対し、北田は多くの人間がナショナリズムの高揚に便乗しているだけであり特に政治的な信条や歴史的な関心とは無関係であるとしているといえるかもしれない。

また、これ以外の説としては、高原の「個別不安型のナショナリズム」がある。これは、経済構造の変動による「社会流動化」によって「堅固な組織に寄りかかる形での将来の予測可能性や、生活の安定性から、人々が放り出されること」（高原 2006 : 39-40）に対する不安からナショナリズムが高揚しているという説である。ここでいう「社会流動化」は、戦後日本で行われてきた「会社主義」、つまり終身雇用制や年功賃金制といった制度が生産構造の変化によって変動が激しくなり、維持することができなくなるということである。この社会で主要な産業となるのは「高付加価値産業」と「サービス業」であり、そこには大量の低賃金労働力を必要とする。欧米ではこのような労働力に移民を使って調達していたが、日本における労働力の調達を以下のように説明している。

当時の日本の「高付加価値産業化」をめぐる議論は、経済外の理由で移民流入を拒否し続けてきた日本で、自国民の内部から低賃金労働力を体よく調達することを推奨していたのであり、「若者」はその最大の供給源とみなされていたのである。（高原 2006 : 61）

これは現在の若者のフリーターやニートの増加という形になって現れている。結果として、「自国民の範囲を恣意的に区切って、残りは低賃金労働者になればよい」（高原 2006 : 61）という意識から生じたこの方式は世代間対立という形で現れたという。では、なぜそれが「嫌韓・嫌中」として現れたのか。これについては「中国脅威論」に関連しているとして以下のように説明している。

私が思うに、インターネット上の「嫌韓・嫌中」とは先に述べたような東アジアを貫いて進行する変動のリスクに耐えられない、末端の企業人たちの慰撫として機能しているようなメディアからの情報に、若者が「付き合っている」状態といえる。（高原 2006 : 90）

ここでいう末端の企業人とは「グローバルな流動性の只中に飛び込みそのリスクを負う余力のある上層部」ではなく、「旧来のセーフティネットにしがみつき続けるを得ないそれ以外の人々」である。そのため、「旧来の日本の自画像と、その延長としての『歴史問題』に固執し続ける保守論壇的な言説」（高原 2006 : 87）が末端の企業人から生じたのである。そして、そのような論調に対して末端の企業人と同じかそれ以上に不安を抱えている若者が同調したという。これは、本来ならば「日本の『アジア蔑視の伝統』などではまったくなく、彼らの抱える先行き不透明感」（高原 2006 : 91）が重要であり、国内に目を向けるべきであるが、そうならなかったのは「『右傾化』する者たち自身の無知というよりも、保守／革新ともに、『社会流動化』への認識を欠き、時にはあたかも日本がその潮流の外部へ逃げられるかのように論じていた」（高原 2006 : 241）ことが原因であるとしている。つまり、「個別不安型のナショナリズム」とは、「社会流動化」によって変化した経済構造に適応させるために若者を低賃金労働者の供給源としたことによって生じた不安感が、問題解決のために国内に向けられるべき視点が国外へと向けられたために生じたナショナリズムであるといえることができる。

第2章 日本におけるナショナリズムの歴史的変遷

第3章 仮説と研究方法

3.1. ナショナリズムに影響を与えている要因と仮説

先行研究から、戦後から1990年代までのナショナリズムは、経済発展が日本人の団結の目的であり、世界第二位の経済大国の国民であることが日本人としての誇りであるという〈経済的なナショナリズム〉と、1990年代以降のナショナリズムは、過去の歴史を見直し、その功績を評価することで日本人としての誇りを持つとする〈歴史修正主義的なナショナリズム〉と表現することができる。

確かに、戦後から1990年代までは戦争とは直接関係のないものとして、ナショナリズムであるという認識がほとんどないままに〈経済的なナショナリズム〉が興隆していた。戦争を回避しつつ国民を日本人として団結させられるこのナショナリズムは受け入れられこそすれ、批判はされなかったのである。また、GHQによる占領政策からはじまる平和教育の障害にもならず、平和教育とナショナリズムの両立ということも、この経済的なナショナリズムは成立させていたと考えられる。

しかし、なぜ1990年代以降に高揚してきた新しいナショナリズムが歴史修正主義的な内容なのかということが疑問に残った。この〈歴史修正主義的なナショナリズム〉を簡単に定義すれば、大東亜戦争で日本が戦争をしたのはやむをえない事情があり、戦争をしたこと自体は批判には値しないということとともに、日本による占領政策は支配された者たちにも多くの利益をもたらした、これまで批判されてきたように否定的なものばかりではなく賞賛されるものも含まれているという考えが基本になっている。この考えを突き詰めれば、戦後は大東亜戦争を反省するということがその出発点にあったために、戦後日本をほとんど全て否定するような内容のナショナリズムであるということが言える。つまり、戦後の日本の歴史的・政治的流れとは全く一線を画した考えであるということが言えるのである。

阿部の言うようなアイデンティティの確立という点から考えた場合、このような戦後日本を全て否定しかねないナショナリズムはあまりにも過激であるように見える。少なくとも、先の戦争を否定するという立場で展開されている社会のなかで新しいナショナリズムが生まれるならば、先の戦争を否定する立場を含みつつアイデンティティも確立できるようなナショナリズムが生まれてもいいように考えられるからである。現に、〈歴史修正主義的なナショナリズム〉は韓国や中国などの地理的に日本に極めて近い国々から批判の的にされている。他者からの承認を求めてきたことを踏まえるとあまりにも異質である。

北田の言うような、それまでの歴史観がアイロニーの対象になり、コミュニケーションの継続のために形式的に歴史修正主義的な立場をとっているにすぎないという理論につい

ては、確かにこの場合にはそれまでの日本を否定するというのも、外国からの批判も関係がない。しかしながら、〈歴史修正主義的なナショナリズム〉がアイロニーの手段になっているとするが、それは偶然の所産であるとしていることには疑問がある。偶然に〈歴史修正主義的なナショナリズム〉が選択されたとすることは少々乱暴ではないかと感じる。たとえ〈歴史修正主義的なナショナリズム〉がアイロニーの手段として選ばれたとしても、一過性のブームで終わってしまうのではないだろうか。1990年代から今のナショナリズムが高揚してきたとすればかなり長期にわたるブームである。

また、高原のいうようにこれが「個別不安型のナショナリズム」であるならば、確かに不安感が歴史問題へと擦り替わったということは説明できるかもしれないが、現在においてはフリーターやアルバイトでの賃金や雇用の問題、そしてニートの問題など格差社会について盛んに議論されている。そのような中において、若者の不安感が実際の生活と関係のなさそうに見える歴史問題へ擦り替わったままではいるのだろうかという疑問が生じる。

どの理論も近年のナショナリズムについてある程度の説明力を有しているが、なぜ〈歴史修正主義的なナショナリズム〉でなければならないのかということが疑問に残っている。まったくのゼロから〈歴史修正主義的なナショナリズム〉が生まれたということはやや現実感がない。これは仮説であるが、もともとこのような考えはずっと存在していたにもかかわらず、戦後の戦争に関連するナショナリズムの放棄という考えから意図して取り上げていなかったものが、インターネットや漫画という個人の考えを世間に発信できる手段によって噴出してきたのではないだろうか。さらに背景として、意図してナショナリズムを放棄してきたものの、そのために作られた社会の整合性に疑問があると考える人間がもともと多かったために長い期間話題となっていると考えられる。これは、たとえば小林は「戦後は『日本が侵略者だった』『反戦平和』の一色に空気をぬりつぶすのか正義で…反対論者には『右翼・悪』のレッテル貼りをして新聞も情報を一方からしか流さない」（小林 1998：21）と主張し、抑圧された「反対論者」という立場から描いており、また山野は戦中を生き延びた老人という架空の登場人物による植民地政策を肯定する発言（山野 2005：26-28）をきっかけとして物語を進めている。両者に共通するのはそれまで伝えられなかった事実を掘り起こす、というスタンスであり、それによって出された主張に若者が説得力を持っていると感じたからではないかと考えたからである。

また、〈歴史修正主義的なナショナリズム〉が全ての年代で高揚しているのかということも疑問として残った。例えば、小林や山野は漫画家であり、自分の意見を発信するための媒体も基本的に漫画である。漫画という媒体を用いているからには、読者の主な対象は漫画に慣れ親しんでいる若い世代であると考えられる。それに加えて、北田が取り上げたインターネット掲示板「2ちゃんねる」も、その活動の舞台がインターネットであるために、インターネットをプライベートで使用している人間が主に書き込みをしていると考えられる。インターネットをプライベートで使用しているのはやはり若い世代のほうが割合は多いのではないのだろうか。逆に、すべての世代が等しく接することのできるテレビや新聞などのマスコミは、〈歴史修正主義的なナショナリズム〉にほとんど迎合していない。これ

らのことを考えると、近年の〈歴史修正主義的なナショナリズム〉の高揚は若い世代ほど高まっていると考えられる。

ナショナリズムは国家の方針、特に教育に深くかかわってくるために非常に興味深い重要なテーマである。

第二次世界大戦への反省から始まった戦後のナショナリズムは、戦争とは直接関係のない〈経済的なナショナリズム〉となり、日本人として団結することで経済を発展させ先進国となった。しかしその反面、戦争を起こさないということを目標に戦争に繋がるようなナショナリズムを否定してきた。それにもかかわらず近年歴史修正主義が高揚しているという。これは先行研究で見えてきた理論だけでは説明することが困難であると思う。それは、それまで否定されてきた歴史修正主義がなぜ選択され高揚しているのかということである。それまで高揚していなかったということは近年まで歴史修正主義が公には存在しなかったということになる。ナショナリズムに変化が訪れるには何かきっかけが必要である。例えば、戦争に繋がるナショナリズムが否定されたのは第二次世界大戦に敗北したことが原因であるし、〈経済的なナショナリズム〉が台頭したのは戦争で負ったダメージを回復し経済的に復興するためと、戦争に繋がるナショナリズムに代わって国民を統合するためのナショナリズムが必要であるという背景があった。

では、近年ではどうだろうか。国民が求めるナショナリズムが変化するほどの社会的な変革は何があるだろうか。一つには阿部のいうように国際化、グローバル化が挙げられるだろう。そして、もう一つには阿部が近年のナショナリズムを読み解くのに注目した「2ちゃんねる」、つまりインターネットによる情報技術の革新が挙げられるだろう。特に、このインターネットによる情報技術の革新は非常に大きな意味があると思われる。それまで、情報の受信はほぼ誰でもすることができたが、情報の発信が出来る人間はごく限られたものだった。情報の発信源としては新聞、テレビ、ラジオなどの「マス・メディア」が挙げられるがこれらは個人が誰でも情報を発信することはできない。しかし、インターネットでは利用者すべてが情報を発信することができる。それまで情報の発信者と受信者が明確に別れていたものが、双方向のやり取りができるようになったということである。つまり、情報の双方向性を有する「コミュニケーション・メディア」の発達がナショナリズムに大きな影響を与えたのではないかということである。

もしも、阿部のいうような国際化やグローバル化によってアイデンティティの構築が近年求められていたとしても、従来ならばアイデンティティの構築に歴史が注目されたとしてもそれまでの歴史観とそれほど相違ない情報によってアイデンティティを構築することで終わっていただろう。これは、阿部の主張から、いくらアイデンティティの構築が求められたからとして、果たして戦争とは関係のないナショナリズムを選択するというそれまでの方針を変えてまで過去の戦争の見直しをしなければならないのかという疑問があるからである。さらに、北田のインターネット上のコミュニケーションの手段として歴史修正主義が選択されたということについても、同じようにそれまで忌避されてきたような歴史修正主義的なナショナリズムを選択するのだろうかという疑問も同じである。また、北田

の主張ではあくまでも一過性のブームであるということになるが、果たして本当にそうなのだろうか、歴史修正主義的な歴史観に賛同しているわけでもないのにコミュニケーションの手段として用いているということも疑問に思う。

この疑問に答えることができる仮説が以下の2つである。

仮説1：インターネットで不特定多数の双方向の情報のやりとりを行えば行うほど歴史修正主義的なナショナリズムを持つ。

仮説2：歴史修正主義的な歴史観を持てば持つほどマス・メディアの発信する歴史観との乖離がある。

仮説1については、それまで一般的な歴史観と異なる歴史観を持っていてもその情報を発信できなかった人たちがインターネットによって情報を発信できるようになったことで、受け手の情報の選択の幅が広まり、結果的に歴史修正主義的なナショナリズムを選択する人間が増えたと考えたためである。また、不特定多数というのは、既存のマス・メディアや歴史観の発信者以外のことである。

仮説2については、それまでの戦争に関係のないナショナリズムに基づいた歴史観を発信してきた中心はテレビや新聞などのマスコミであると考えられるからである。それまで、情報の発信者が限られてきたなかで歴史修正主義的なナショナリズムが高揚していないということは、従来情報の発信者が歴史修正主義的なナショナリズムを否定してきたということである。さらに、現在も歴史修正主義的なナショナリズムにマスコミが迎合しているとは思えない。これは、北田が2ちゃんねるの中でいわゆる「ネットウヨ」がマスコミに否定的な発言をしていると指摘していることからそれがわかる。

以上の2点を中心にして以後分析をしていく。

3.2. 研究の方法と意義

本論文では山形大学地域教育文化学部生活総合学科の学生1～3年に対するアンケートをもとに計量分析を行う。サンプル数としては少ないながらも生活総合学科を対象にした全数調査ともいえる。また、既存の調査データを用いないことで任意に質問項目を設定することができるので、より精度の高い分析ができると考えている。

歴史観に影響をあたえている要因についてインターネットを中心に分析を行っていく。

これまで、ナショナリズムにインターネットが影響を与えているということは先行研究にもいくつか見受けられたが、今回の論文の意義とオリジナリティは、非常にミクロな個人というレベルの属性、行為と意識の関係からナショナリズムというマクロな意識現象を説明しようとしたことである。上記の先行研究では社会的趨勢の変化、たとえばグローバル化や流動化社会への変異などマクロな視点から同じくマクロなナショナリズムを説明し

ようとしている。また、阿部のようにインターネットを主題にしているが、阿部も若者の間のコミュニケーションの方法が変化したというマクロな視点で説明している。これらマクロな視点とは異なる、新しい視点を導入することでこれまでには見えなかったものが見えてくると考えている。

3.3. 調査の概要と分析に使用する変数

今回の研究では、山形大学地域教育文化学部生活総合学科の各コースで必修として開講されている授業科目を履修中の1年生(86名)、2年生(80名)、3年生(83名)の249名を対象に全数調査を行い、それを分析に用いた。調査期間は2007年6月18日から22日、各科目の授業時間中に調査票を配布し、回答および回収はその授業時間内に行った。回答は計225名、そのうち有効回答は224名から回収することができた(有効回収率90.0%)。

以下は、調査票のなかから実際に使用する変数について記述する。なお、各変数を観測するために使用した質問は、実際の質問紙と同じ形で、それぞれの質問の単純集計表とともに本論文末尾に付録として収録している。

(1) インターネットの利用頻度

問2のインターネット上のサイトやサービスをどの程度利用したかを使用した。特に問2ウ)の「掲示板の利用時間」について着目する。これはインターネットがもたらした双方向の情報のやり取りという特徴を持っており、またインターネット掲示板の利用者が数量的に多いためである。本稿での変数名を「インターネット掲示板(分)」とする。

(2) 孤独感

問5の回答を集計し孤独感尺度として使用した。ここでは本稿での変数名を「改訂版 UCLA 孤独感得点」とする。

(3) 国民意識尺度

問6は唐沢(1994:246-247)の「国民意識尺度 日本語版」の「愛国心」と「国家主義」の項目を利用し回答を集計し国民意識尺度として使用した。数値が高いほど国民意識が高いことを示している。本稿での変数名は上記のように「愛国心」と「国家主義」である。

(4) 本人の歴史観

問7の回答を得点化し平均を求めることでどの程度回答者が歴史修正主義的なナショナリズムを持っているのかを計る指標として使用した。この数値が高いほど歴史修正主義的であることを示している。これは第二次世界大戦中と直前に日本

第3章 仮説と研究方法

が行った政策、日本軍の作戦のうち特に歴史修正主義的な議論の対象になる項目について日本に大きな責任があるとするか、ないとするかでその人の歴史観を計るものである。ここで挙げた項目は歴史観によってその捉え方が大きく異なるものである。

(5) 歴史観に影響を受けたもの

問8の回答で、回答のあったものを1、なかったものを0として再コード化し使用した。

(6) マスコミの歴史観

問9の回答を得点化し平均を求めることで、マスコミの報道からどの程度歴史修正主義的なナショナリズムの印象を受けたかを量る指標として利用した。質問項目については問8と同じものであり、この数値が高いほどマスコミの報道が歴史修正主義的であると受けとめられているということである。

(7) 性別

問11の回答について男性を1、女性を0として再コード化して使用した。

第4章 データの分析

4.1. 歴史観に影響を与える要因について

今回の研究では主に「本人の歴史観」に影響を与える要因を分析する。そのため、まずは「本人の歴史観」と相関関係にあるものを調べる。その結果は以下のとおりである。

表 2-1 本人の歴史観との相関係数（全体）

| 変数 | 相関係数 | N |
|--------------------|------------|-----|
| 性別 | .240 (**) | 200 |
| インターネット掲示板（分） | .255 (**) | 200 |
| 改訂版 UCLA 孤独感得点 | .186 (**) | 197 |
| 愛国心 | .079 | 199 |
| 国家主義 | .175 (*) | 199 |
| [本人の歴史観に影響]インターネット | .205 (**) | 200 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.329 (**) | 200 |
| マスコミの歴史観 | .329 (**) | 150 |

* $p < .05$, ** $p < .01$

「本人の歴史観」と1%水準で相関関係にあるのは「性別」「インターネット掲示板（分）」「改訂版 UCLA 孤独感得点」「[本人の歴史観に影響]インターネット」「[本人の歴史観に影響]学校の授業」「マスコミの歴史観」であり、国民意識の中では「国家主義」が5%水準で有意となり、「愛国心」は相関関係にはない。この段階では、仮説1のインターネットでの双方向のやり取りが歴史観に影響を与えているということは「インターネット掲示板（分）」が有意な相関関係にあるために否定されてはいない。しかし、他にも相関関係にあるものが多く、これだけで説明できるものではない。また、「本人の歴史観」と「マスコミの歴史観」が相対的に強い相関関係にあることがわかる。

では、次にこれら相関関係にあった変数を説明変数として、「本人の歴史観」を被説明変数とすることで、どの変数が説明力を有するのかということ、回帰分析を用いて分析する。以下はその結果である。

表 2-2 本人の歴史観を被説明変数とした場合の回帰分析（全体）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | 標準誤差 | 標準化 偏回帰係数 |
|--------------------|------------|------|--------------|
| 性別 | .121 | .125 | .074 |
| インターネット掲示板（分） | .004 (*) | .002 | .148 |
| 改訂版 UCLA 孤独感得点 | .040 (*) | .016 | .182 |
| [国民意識尺度得点]国家主義 | .022 | .015 | .112 |
| [本人の歴史観に影響]インターネット | .263 | .164 | .124 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.392 (**) | .132 | -.224 |
| マスコミの歴史観 | .273 (***) | .062 | .313 |
| 調整済み R^2 | .289 | | |
| F 値 | 9.524 (**) | | |

従属変数：本人の歴史観

$N = 148$. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

これで見ると、説明力を有していると思われるのは 1%水準で有意である「[本人の歴史観に影響]学校の授業」と「マスコミの歴史観」であり、加えて 5%水準で有意となる「インターネット掲示板（分）」と「改訂版 UCLA 孤独感得点」である。

インターネットに注目してみると、「[本人の歴史観に影響]インターネット」が有意ではなく、「インターネット掲示板（分）」が有意であるということは、より双方向の情報のやりとりが歴史観に影響を与えるという仮説 1 を裏付けているように見える。つまり、「[本人の歴史観に影響]インターネット」は双方向の情報のやり取り以外のインターネットの利用も含まれていると考えられるからである。これについてはさらに「インターネット掲示板（分）」以外のインターネットにおけるサービスと同時に比較してみる。

表 2-3 本人の歴史観を被説明変数としたインターネットサービス間の比較

| 独立変数 | 偏回帰係数 | 標準誤差 | 標準化 偏回帰係数 |
|----------------|------------|------|--------------|
| ニュースサイト（分） | .006 | .081 | .109 |
| 個人の Web ページ（分） | .002 | .002 | -.082 |
| インターネット掲示板（分） | .006 (**) | .002 | .205 |
| チャット（分） | .006 (*) | .003 | .146 |
| ブログ（分） | .001 | .002 | .034 |
| SNS（分） | .000 | .002 | .016 |
| 調整済み R^2 | .070 | | |
| F 値 | 3.508 (**) | | |

従属変数：本人の歴史観

$N = 199$, $*p < .05$, $**p < .01$

ここから読み取れるのは、「インターネット掲示板（分）」と「チャット（分）」の二つが説明力を有しているがそのほかは説明力を有していない。この 2 つとそのほかのサービスとの違いは不特定多数による双方向の情報のやり取りを行っているかどうかということに集約される。「ニュースサイト（分）」と「個人の Web ページ（分）」、そして「ブログ（分）」は情報の発信者が特定された個人あるいは特定された集団であることに加えて、基本的に情報の発信は行うが受信をすることが主要な目的ではない。「SNS（分）」では、双方向の情報のやり取りは可能かもしれないが不特定多数の参加を前提に行っているものではない。

インターネット掲示板の利用時間が増える、すなわち不特定多数の人間と双方向の情報のやり取りをする時間が増えると〈歴史修正主義的なナショナリズム〉が増大するということは今回の調査で裏付けられたといえる。

また、「本人の歴史観」に影響を与えるものとして「改訂版 UCLA 孤独感尺度」も有意な説明変数であることが見て取れる。つまり、孤独感が強い人ほど〈歴史修正主義的なナショナリズム〉を持ちやすいということである。

しかし、インターネット掲示板の説明力は「[本人の歴史観に影響]学校の授業」「マスコミの歴史観」と比べると弱いことがわかる。「[本人の歴史観に影響]学校の授業」は「本人の歴史観」とは負の相関関係にあり、学校の授業に影響を受けたと回答した人ほど歴史修正主義的なナショナリズムは低い傾向にあることがわかる。また、その説明力も大きい。これは国民ならばほぼ全員が義務教育を受けるためその影響力を大きく受けるのはほぼ当然といえる。また、これは戦後の日本が第二次世界大戦での日本の行為を反省するという立場にあるということを示す一つの証明であると考えられる。日本における歴史教育の方向性を示しているといってもいいかもしれない。

第4章 データの分析

「マスコミの歴史観」が「本人の歴史観」と正の相関を持っているということも注目しなければならない。「マスコミの歴史観」は本人を基準にした極めて主観的で相対的な数値である。それは「本人の歴史観」も同じく主観的な意識であるが、「マスコミの歴史観」はさらにその「本人の歴史観」を基準にしてどのように受け止めるかということに左右されるからである。そこで重要なのが、「本人の歴史観」と「マスコミの歴史観」との間にある意識の差異である。

そこで、この二つの変数を操作し新たな変数である「歴史観の差」を設定する。これは変数「本人の歴史観」から変数「マスコミの歴史観」を引き、両者にどのような差異があるかを考えるためのものである。

しかし、このままでは「本人の歴史観」の値によって理論上の最大値、最小値に大きな差がでてしまうことになる。そのためにこの「歴史観の差」を最小値=0、最大値=1をとるように標準化する必要がある。「歴史観の差」の理論上の最小値(=min)は、「マスコミの歴史観」の最大値が5であるため、 $\text{min} = \text{「本人の歴史観」} - 5$ で求めることができる。逆に、「歴史観の差」の理論上の最大値(=max)は「マスコミの歴史観」の最小値が1であるため、 $\text{max} = \text{「本人の歴史観」} - 1$ で求めることができる。以上のことから「歴史観の差」を標準化する場合、「歴史観の差」 < 0 の場合は「歴史観の差」 $\div \text{min}$ 、「歴史観の差」 ≥ 0 の場合は「歴史観の差」 $\div \text{max}$ で求めることができる。ここで求められた値を絶対値化したものを「歴史観の差の絶対値(標準化)」とする。

「本人の歴史観」と「歴史観の差の絶対値(標準化)」の関係を散布図で表すと以下のようになる。

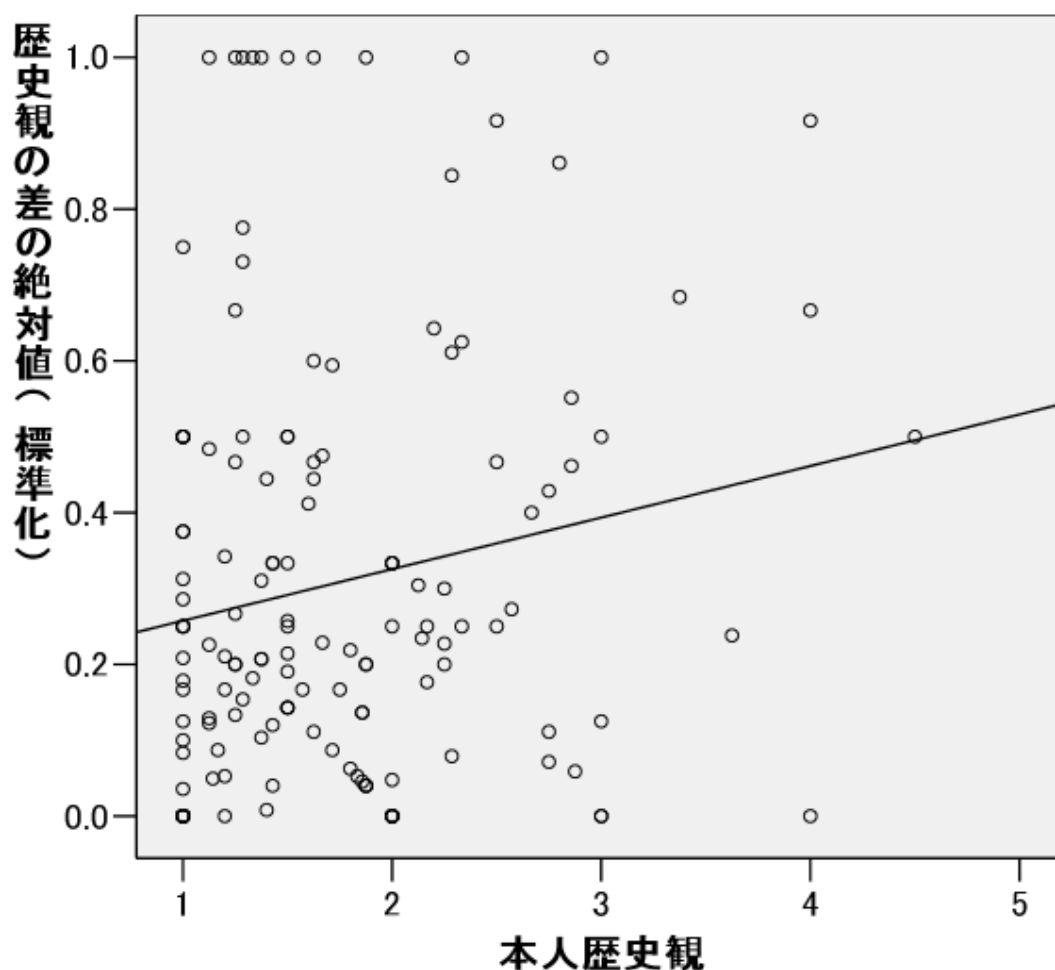


図 2-1 「本人の歴史観」と「歴史観の差の絶対値（標準化）」との散布図

この2つの変数の相関係数は.172 ($N=150$) で、5%水準で有意となるため、「本人の歴史観」の数値が大きくなればなるほど「マスコミの歴史観」との乖離が進むということになる。つまり、歴史修正主義的な歴史観を持てば持つほどマス・メディアとの意見の乖離が生じるという仮説2が成り立つということである。

4.2. 性別からみる違いについて

これまでは調査データ全体の分析を行ってきたが、ここで一つの疑問が生じることになった。それはこの調査データの男女比である。有効回答の数において女性 171 名に対して男性 53 名と大きな差があるためである。性別によって差異があるかどうか、もしもあればそれによって全体の分析に影響を与えている可能性がある。

第4章 データの分析

そこでまず男性と女性で「本人の歴史観」にどの程度差異が生じるのかを考えてみる。そこで、「本人の歴史観」に対して男性と女性それぞれの平均値の差と、その差は有意な差があるかどうかということを検討しよう。

男性 ($N=47$) の平均値は 2.015 (標準偏差 .981), 女性 ($N=153$) の平均値は 1.602 (標準偏差 .605), 等分散性の仮定は棄却されるためウェルチの検定を行うと検定統計量 -2.729 ($df = 57.139$) となり, 母平均の差が等しいという帰無仮説は 1%水準で棄却される。つまり, 男性と女性の間が生じた「本人の歴史観」の差はなにかしらの要因によって差があるということであると考えられる。

さらに, 今回の分析において重要な要素の 1 つであるインターネット掲示板の利用時間について男性と女性の平均の差を分析してみる。

男性 ($N=53$) の平均値は 24.43 (標準偏差 42.56), 女性 ($N=171$) の平均値は 10.84 (標準偏差 21.21), 等分散性の仮定は棄却されるためウェルチの検定を行うと検定統計量 -2.240 ($df = 60.208$) となり, 母平均の差が等しいという帰無仮説は 5%水準で棄却される。

このように, インターネット掲示板の利用時間については男性と女性の平均値の間に 13 分以上の差があり, 男性は女性に比べて 2 倍以上の時間をインターネット掲示板の利用に費やしているといえる。

「本人の歴史観」と「インターネット掲示板 (分)」という今回の研究の重要な要素である 2 つの変数においても男性と女性の差ははっきりと見ることができる。インターネットによる双方向の情報のやり取りが歴史観に影響を与えるということを考えると, 男性のほうがインターネット掲示板の利用時間が多く, さらに「本人の歴史観」でも女性よりも歴史修正主義的であるということは仮説 1 に当てはまる。しかし, 前述のように, 歴史観に影響を与える要因は複数あり, 男性と女性で歴史観に影響を与える要因が違うということも十分に考えることができる。そこで, 以下は男性と女性でどのような違いがあるのかということを見ていくことにする。

まずは, サンプル数の多い女性の分析から始めることとする。女性について, 表 2-1 と同様の相関関係を見ていく。ただし, 「性別」については今回の場合意味はないため除外する。

表 2-6 本人の歴史観との相関係数 (女性)

| 変数 | 相関係数 | N |
|--------------------|------------|-----|
| インターネット掲示板 (分) | .108 | 153 |
| 改訂版 UCLA 孤独感得点 | .244 (**) | 151 |
| 愛国心 | .090 | 152 |
| 国家主義 | .183 (*) | 153 |
| [本人の歴史観に影響]インターネット | .023 | 153 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.251 (**) | 153 |
| マスコミの歴史観 | .282 (**) | 111 |

* $p < .05$, ** $p < .01$

女性の場合、「本人の歴史観」と有意な相関関係にあるのは、1%水準では「改訂版 UCLA 孤独感得点」「[本人の歴史観に影響]学校の授業」「マスコミの歴史観」、5%水準では「[国民意識尺度]国家主義」である。全体で分析したものと比べると「インターネット掲示板(分)」と「[本人の歴史観に影響]インターネット」が有意でなくなり、相関係数についてもほとんど影響を与えているとは思えない数値である。他の変数についてはほぼ同様の傾向を示している。この差異は女性のインターネット掲示板の利用時間が男性と比べて少ないことが原因であると見ることができる。

では、本人の歴史観を被説明変数とし、他の変数を説明変数として、回帰分析を行い、それぞれどの変数が説明力を持っているかを見る。

表 2-7 本人の歴史観を被説明変数とした場合の回帰分析（女性）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | 標準誤差 | 標準化 偏回帰係数 |
|--------------------|-------------|------|--------------|
| インターネット掲示板（分） | .002 | .003 | .070 |
| 改訂版 UCLA 孤独感得点 | .038 (*) | .018 | .191 |
| 愛国心 | .006 | .019 | .032 |
| 国家主義 | .028 | .017 | .159 |
| [本人の歴史観に影響]インターネット | -.084 | .222 | -.035 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.430 (*) | .151 | -.260 |
| マスコミの歴史観 | .188 (*) | .073 | .229 |
| 調整済み R^2 | .189 | | |
| F 値 | 4.607 (***) | | |

従属変数：本人の歴史観

$N = 108$. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

以上のように、説明力を有する変数は「改訂版 UCLA 孤独感得点」「[本人の歴史観に影響]学校の授業」「マスコミの歴史観」でいずれも 5%水準で有意である。この表は後の男性の場合との比較に用いる。

では、さらに相関関係で有意となったものについて回帰分析を行い、どの変数が説明力を持っているのかを見ていく。

表 2-8 本人の歴史観と有意な相関関係のある変数での回帰分析（女性）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | 標準誤差 | 標準化 偏回帰係数 |
|------------------|------------|------|--------------|
| 改訂版 UCLA 孤独感得点 | .036 (*) | .017 | .185 |
| 国家主義 | .031 (*) | .015 | .176 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.422 (**) | .143 | -.256 |
| マスコミの歴史観 | .194 (**) | .071 | .239 |
| 調整済み R^2 | .205 | | |
| F 値 | 7.949 (**) | | |

従属変数：本人の歴史観

$N = 108$. * $p < .05$, ** $p < .01$

表 2-8 で見ると、1%水準で有意なのは「[本人の歴史観に影響]学校の授業」と「マスコミの歴史観」であり、5%水準で有意なのは「改訂版 UCLA 孤独感尺度」と「[国民意識尺度得点]国家主義」である。また、調整済み R^2 を比べると、表 2-7 のモデルよりも説明力が増加している。

つまり、女性の場合は学校での授業とマス・メディアの情報が本人の歴史観を規定することに最も説明力を有し、ついで国家主義と孤独感がそれに続く。インターネットによる影響というものは見受けられなかった。全体のデータとの違いはインターネット掲示板の利用は説明力を有していないのに対して国家主義が説明力を有しているという点である。

では、次に男性の場合を分析する。まずは「本人の歴史観」を中心にして、表 2-6 と同じ項目で相関関係を見てみる。

表 2-9 本人の歴史観との相関係数（男性）

| 変数 | 相関係数 | N |
|--------------------|-----------|----|
| インターネット掲示板（分） | .323 (*) | 47 |
| 改訂版 UCLA 孤独感得点 | .072 | 46 |
| 愛国心 | -.066 | 47 |
| 国家主義 | .126 | 46 |
| [本人の歴史観に影響]インターネット | .023 | 47 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.346 (*) | 47 |
| マスコミの歴史観 | .393 (*) | 39 |

* $p < .05$

男性の場合は 5%水準で「インターネット掲示板（分）」「[本人の歴史観に影響]学校の授業」「マスコミの歴史観」が有意な相関関係にある。

国民意識では「愛国心」「国家主義」ともに有意ではなく、また「改訂版 UCLA 孤独感得点」も有意ではなく、それが女性の場合の相関関係との大きな違いであるといえる。

1%水準で有意な相関がないのはおそらく男性のサンプル数が少ないことに起因していると考えられる。もしもサンプル数がこれよりも多く取れるのならばその問題は解決できると考えられる。しかし、現在有意な関係にないものは相関係数が非常に低いためにサンプル数が多くなっても有意な相関関係にあるとは言い切れない。

ここでは、表 2-7 と同じく、本人の歴史観を被説明変数として回帰分析を行う。

表 2-10 本人の歴史観を被説明変数とした場合の回帰分析（男性）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | 標準誤差 | 標準化 偏回帰係数 |
|--------------------|-----------|------|--------------|
| インターネット掲示板（分） | .004 | .003 | .199 |
| 改訂版 UCLA 孤独感得点 | .035 | .039 | .140 |
| 愛国心 | .009 | .037 | .036 |
| 国家主義 | .014 | .039 | .060 |
| [本人の歴史観に影響]インターネット | .529 | .296 | .272 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.378 | .312 | -.202 |
| マスコミの歴史観 | .384 (**) | .135 | .430 |
| 調整済み R^2 | .292 | | |
| F 値 | 3.239 (*) | | |

従属変数：本人の歴史観

$N = 38$. * $p < .05$, ** $p < .01$

表 2-10 を見ると、有意な説明力を持っている変数は 1%水準で「マスコミの歴史観」のみとなっている。これは、おそらくサンプル数の問題であると考えられる。ここで、表 2-7 を用いて女性の場合との比較を行う。女性と男性で共通していることは「マスコミの歴史観」が強い説明力を有しているということである。つまり、「マスコミの歴史観」については性別を問わずに説明変数として適しているということがわかる。ただし、標準化偏回帰係数を比べてみると、女性よりも男性のほうがより大きな数値を取っているということがわかる。つまり、「マスコミの歴史観」については性別を問わずに有意な説明変数であることには変わらないが、男性のほうが女性に比べて影響を与える度合いが大きいということになる。

また、女性の場合有意であった他の変数と比べてみると、「改訂版 UCLA 孤独感得点」については、男性の場合には有意でないことはそうであるが、男性のほうが若干標準化偏回帰係数は小さい。また、「[本人の歴史観に影響]学校の授業」と「国家主義」についても同様で、男性の場合には有意でないことに加えて標準化偏回帰係数が小さいことがいえる。

第4章 データの分析

加えて、男性も女性も有意ではないとはいえ、「インターネット掲示板（分）」については標準化偏回帰係数は男性のほうが大きいということがわかる。

次に、相関関係で有意なもので回帰分析を行う。以下は回帰分析の結果を表にまとめたものである。

表 2-11 本人の歴史観と有意な相関関係のある変数での回帰分析（男性）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | 標準誤差 | 標準化 偏回帰係数 |
|------------------|------------|------|--------------|
| インターネット掲示板（分） | .007 (*) | .003 | .316 |
| [本人の歴史観に影響]学校の授業 | -.600 (*) | .262 | -.320 |
| マスコミの歴史観 | .324 (*) | .124 | -.363 |
| 調整済み R^2 | .332 | | |
| F 値 | 5.807 (**) | | |

従属変数：本人の歴史観

$N = 53$. * $p < .05$, ** $p < .01$

表 2-9 から、「インターネット掲示板（分）」「[本人の歴史観に影響]学校の授業」「マスコミの歴史観」が 5%水準で有意であった。有意確率が 5%水準でとどまっているのは、やはり男性のサンプル数が少ないことに起因していると考えられる。しかし、仮説 1 のインターネットによる双方向の情報のやり取りが歴史修正主義的な歴史観を持たせる要因であるということは、「インターネット掲示板（分）」が説明力を有していることから証明することができる。

男性と女性とで「本人の歴史観」に影響を与える要因について別個に分析するとその差異があることがわかる。両者で共通しているのは、「[本人の歴史観に影響]学校の授業」と「マスコミの歴史観」である。この 2 つの要因は性別によって左右されることなく今回のアンケートの回答者に影響力をもっている。学校の授業については、日本では国民のほとんどが男女の区別なくほぼ同じ内容の歴史を義務教育を通じて行われる。そのため学校の授業が歴史観に大きな影響をもっているということは間違いない。そして、学校の授業が「本人の歴史観」に負の相関関係にあるということは、学校の授業の影響を受けた人は歴史修正主義的な歴史観を持たないということである。これは、戦後の日本が第二次世界大戦時の日本の行為を反省するという立場に立ち、教育を行ってきたということの証明でもありと考えられる。

性別で違いがあらわれたのは、女性では「改訂版 UCLA 孤独感得点」と「[国民意識尺度得点]国家主義」が説明変数として説明力を有しているのに対して、男性では「インターネット掲示板（分）」が説明変数として説明力を有していたということである。これは表 2-5 で見ると、女性に比べて男性のほうがインターネット掲示板を利用しているということからくるものだろう。逆に、女性はインターネット掲示板の利用率が低いために、歴史

観については他のものの影響を受ける。孤独感から歴史修正主義にいたり、国家主義の立場から歴史修正主義的な歴史観を持つにいたる。しかし、表 2-4 にあるように、男性と女性では「本人の歴史観」の平均値では男性のほうが高く、より歴史修正主義的な歴史観を持っているといえる。インターネット掲示板と、孤独感や国家主義では、インターネットのほうがより歴史観に影響を与えられられる。

4.3. 影響の方向性について

ここまでの分析で女性の場合には「UCLA 孤独感得点」「国家主義」「[本人の歴史観に影響]学校での授業」「マスコミの歴史観」の 4 つが歴史観に影響し、男性の場合には「インターネット掲示板（分）」「[本人の歴史観に影響]学校での授業」「マスコミの歴史観」の 3 つが影響しているということがわかった。女性の場合にはインターネットによる双方向の情報のやりとりが歴史観に影響しているという仮説は成り立たないものの、インターネット掲示板の利用率が女性よりも多い男性の場合にはそれが成り立つことがわかる。また、女性の場合にはインターネット以外に歴史観に影響を与える要因として「UCLA 孤独感得点」と「国家主義」がその役割を果たす。また、義務教育を含む歴史教育の影響が強いことは「[本人の歴史観に影響]学校での授業」が男性女性ともに非常に強い説明力を持っていることから考察することができる。

しかし、「マスコミの歴史観」については明確に答えることはできない。「マスコミの歴史観」が回答者のなかで形成された時期はいつなのか、または「マスコミの歴史観」が「本人の歴史観」を形成する 1 要素であるのか、それとも「本人の歴史観」が基準となって「マスコミの歴史観」を位置づけているのかはこれまでの分析では述べることはできない。マス・メディア自身が報道する歴史解釈の立ち位置が一定であったとしても、それを受け入れる回答者のなかで明確な歴史観があればそれを基準として受け取り方が変わるといえる。一方でマス・メディアの報道によって回答者の歴史観が左右されるということも考えられる。

ただし、これまでの分析で全体では「本人の歴史観」の数値が高い、つまり歴史修正主義的な歴史観を持っている人ほど「マスコミの歴史観」の数値が「本人の歴史観」よりも低い数値にあるということがわかっている。それに加えて「本人の歴史観」が主観的とはいえ回答者の歴史認識の意識そのものということができるとして、「マスコミの歴史観」はマス・メディアの情報に対する回答者の評価ということが出来る。このことを考えると時系列的には「本人の歴史観」の後に「マスコミの歴史観」があると考えられる。

以下は歴史観に影響を与える要因について、その影響の方向性についてパス図を用いることで検証していく。

まず、「本人の歴史観」と「マスコミの歴史観」は表 2-6 と表 2-8 から男性と女性ともに 1% 水準で有意な相関関係にある。そこで、これまでの分析では「本人の歴史観」を被説明変数、「マスコミの歴史観」を説明変数としてきたが、「マスコミの歴史観」が「本人の歴史

第4章 データの分析

観」を基準として受け取り方が回答者によって左右される前提で「マスコミの歴史観」を被説明変数、「本人の歴史観」を説明変数として回帰分析を行う。

以下はその結果である。

表 2-12 マスコミの歴史観を被説明変数とした場合の回帰分析

| 独立変数 | 女性 | | 男性 | |
|------------|------------|------|-----------|------|
| | 回帰係数 | 標準誤差 | 回帰係数 | 標準誤差 |
| 本人の歴史観 | .344 (**) | .112 | .440 (**) | .169 |
| 調整済み R^2 | .071 | | .132 | |
| F 値 | 9.401 (**) | | 6.771 (*) | |
| N | 108 | | 53 | |

従属変数：マスコミの歴史観
* $p < .05$, ** $p < .01$

回帰分析の結果、両者とも「マスコミの歴史観」を被説明変数、「本人の歴史観」を説明変数としても問題はない。「本人の歴史観」は1%水準で有意であり、説明力は十分にある。

以上の結果から、パス図を性別で分けて作成する。

まずは女性から見る。ここでは、「本人の歴史観」と「マスコミの歴史観」に注目して、どちらが影響を与えているのかを比べてみる。

図 2-2-1 では「本人の歴史観」が「マスコミの歴史観」に影響を与えている場合、そして図 2-2-2 では「マスコミの歴史観」が「本人の歴史観」に影響を与えている場合である。ちなみに、この2つのパス図では「改訂版 UCLA 孤独感得点」「国家主義」「[本人の歴史館に影響]学校での授業」が「本人の歴史観」に影響を与えている。

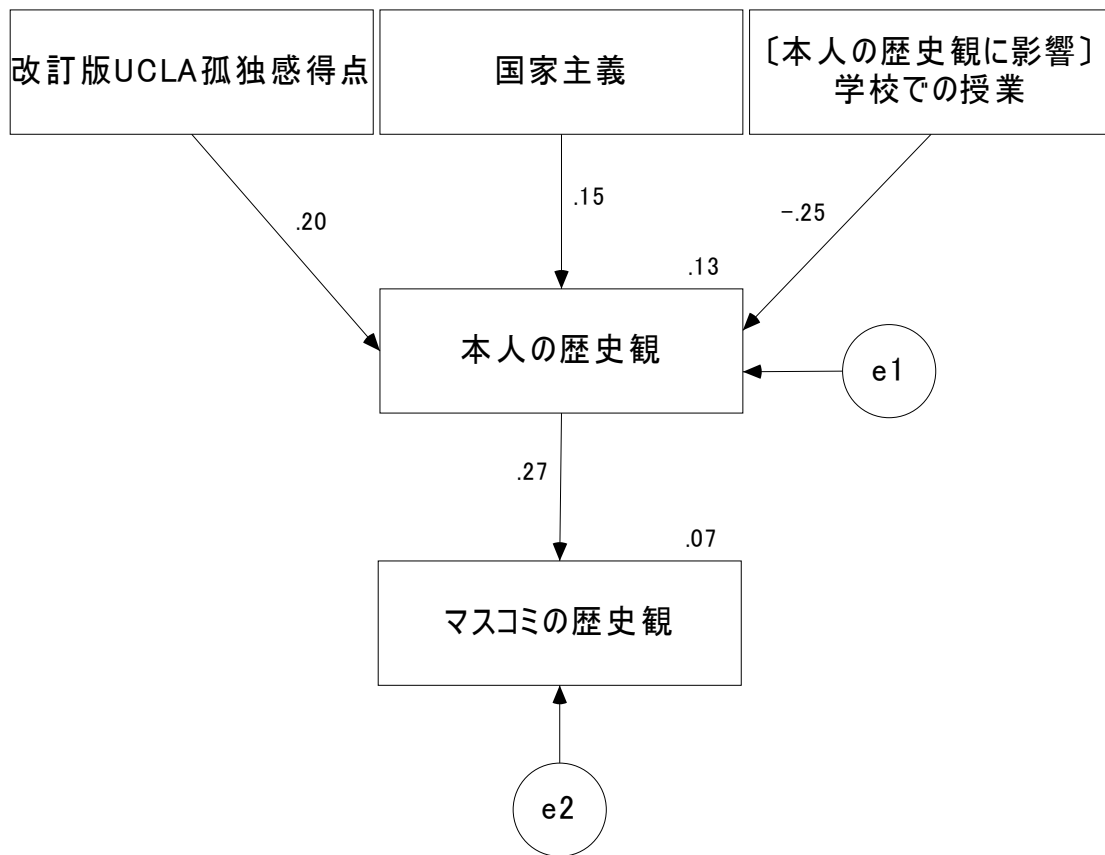


図 2-2-1 歴史観に関する影響の方向性（女性）

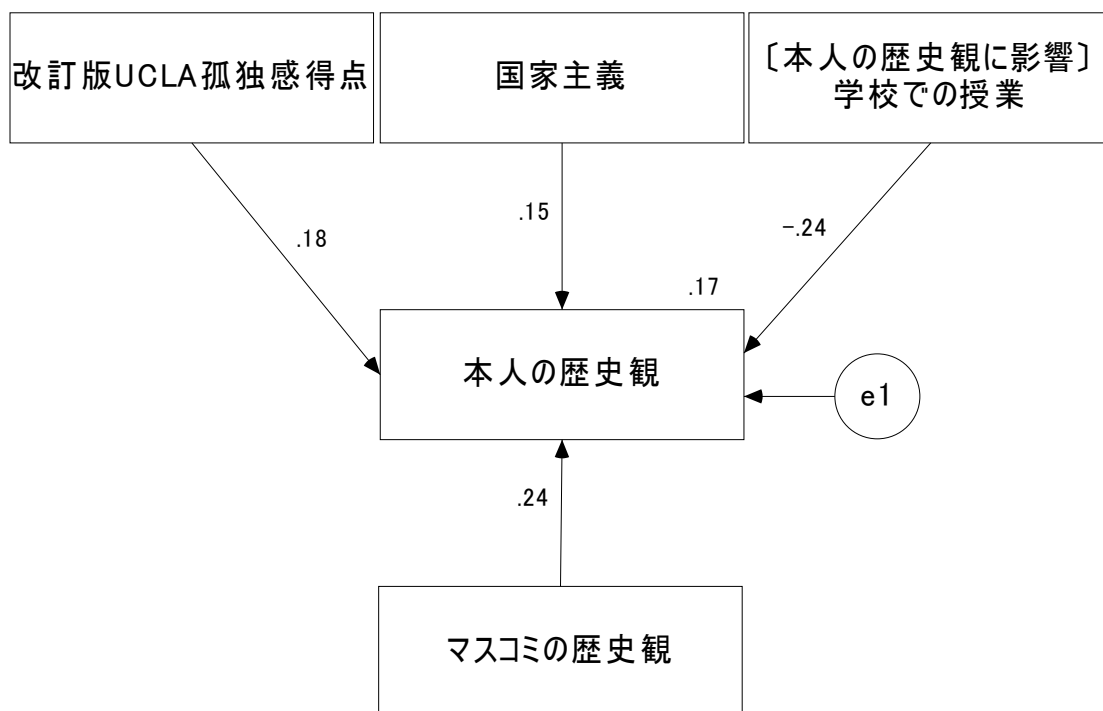


図 2-2-2 歴史観に関する影響の方向性（女性）

図 2-2-1 のパス図の AIC は 31.835 である。

また、図 2-2-2 のパス図の AIC は 33.299 である。

AIC は低い数値のほうがより当てはまりが良いと考えられるので、この場合は「本人の歴史観」が「マスコミの歴史観」に影響を与えていると考えたほうが当てはまりが良いということになる。

では次に男性の場合を見てみる。

男性の場合でも「本人の歴史観」と「マスコミの歴史観」の影響の方向性を中心に見てみる。図 2-3-1 が「本人の歴史観」が「マスコミの歴史観」に影響を与えている場合であり、図 2-3-2 が「マスコミの歴史観」が「本人の歴史観」に影響を与えている場合である。

ちなみに、男性の場合では他に「インターネット掲示板（分）」と「[本人の歴史観に影響] 学校の授業」がそれぞれ「本人の歴史観」に影響を与えていることとする。

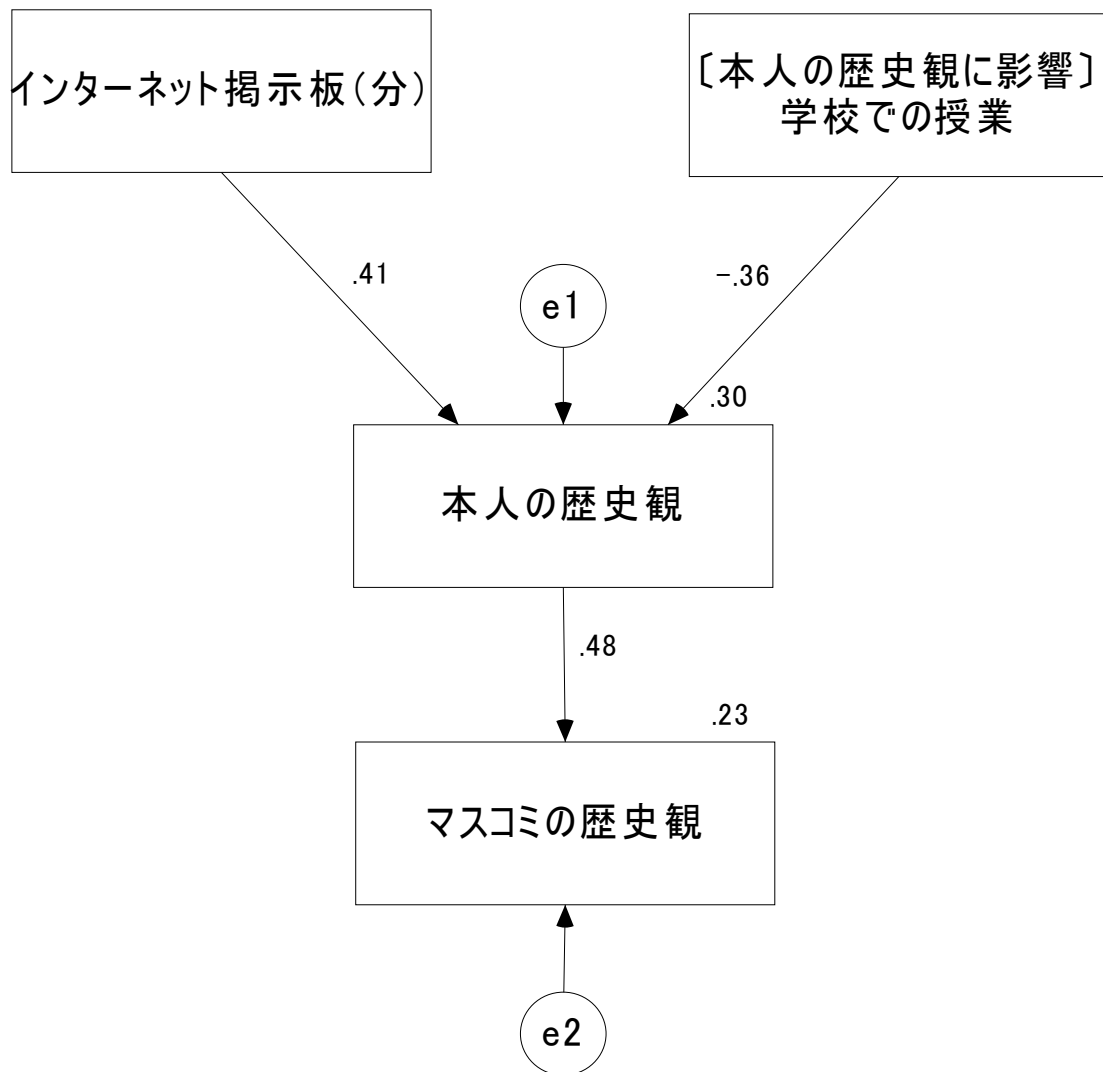


図 2-3-1 歴史観に関する影響の方向性（男性）

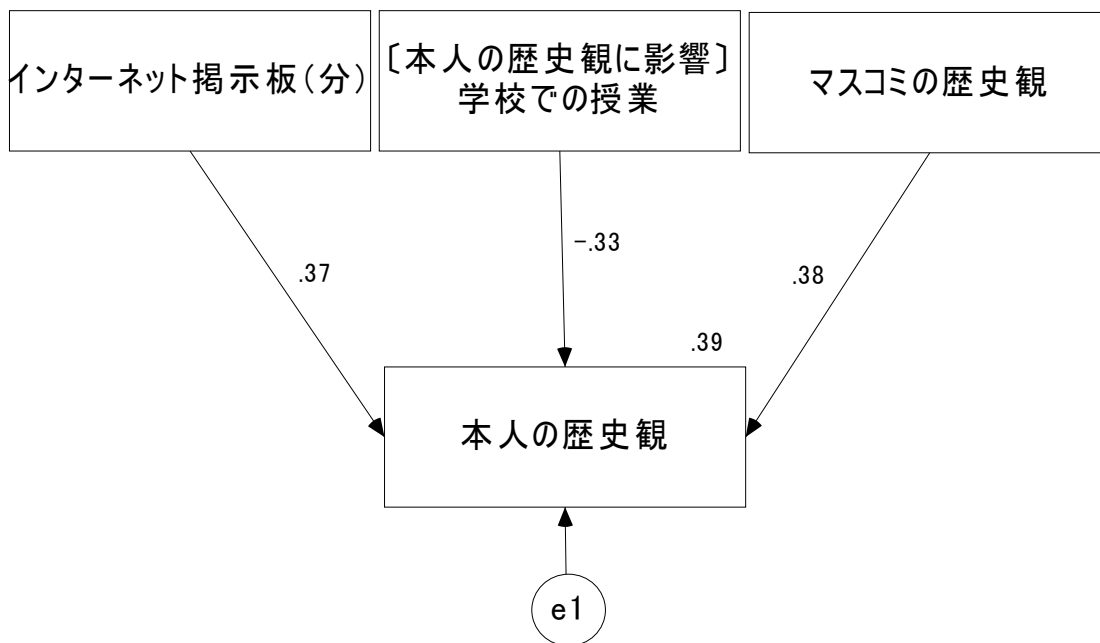


図 2-3-2 歴史観に関する影響の方向性 (男性)

図 2-3-1 のパス図の AIC は 22.120 である。

また、図 2-3-2 のパス図の AIC は 24.207 である。

この二つを比べてみた場合、より当てはまりがいいのは図 2-3-1 の場合で、「本人の歴史観」が「マスコミの歴史観」に影響を与えている場合である。

つまり、女性の場合も男性の場合も、「本人の歴史観」が「マスコミの歴史観」に影響を与えている、つまりマスコミの報道の内容をどう判断するのは本人の歴史観によって左右されるものである、ということである。

第5章 まとめと今後の課題

5.1. 分析の考察

今回の分析では仮説 1 のインターネットで不特定多数の双方向の情報のやりとりを行えば行うほど〈歴史修正主義的なナショナリズム〉を持つということについては、男性と女性において歴史観に影響を与えた要因の差異と、女性よりも男性のほうが歴史修正主義的な歴史観を持っているということから証明できたと考えている。

男性では「本人の歴史観」に影響を与えるものに「インターネット掲示板（分）」があり、女性にはない。また、同じようにインターネットに関する項目である「[本人の歴史観に影響]インターネット」は男性女性ともに「本人の歴史観」に影響を与える要因として説明力を持たなかった。これは、「[本人の歴史観に影響]インターネット」はインターネットで不特定多数との双方向の情報のやりとりに限定されることなく、その条件を満たしている「インターネット掲示板（分）」が説明力を有しているということにより仮説 1 を証明するものであると考える。

仮説 2 の歴史修正主義的な歴史観を持てば持つほどマス・メディアの発信する歴史観との乖離があるということは、図 2-1 を分析することで肯定されることになった。

また、影響の方向性を考えた場合、女性の場合は「改訂版 UCLA 孤独感尺得点」「国家主義」「[本人の歴史観に影響]学校での授業」、男性の場合は「インターネット掲示板（分）」「[本人の歴史観に影響]学校での授業」が「本人の歴史観」に影響を与え、そこで形成された「本人の歴史観」によって「マスコミの歴史観」に影響を与える。つまりマス・メディアがどのような主張をしているのかということが個人によって判断されるということになる。

これは非常に重要なことではないかと考えている。それは、歴史に対する判断の材料が多様化するからである。インターネット普及以前は情報を得る手段はマス・メディア、つまりテレビや新聞、ラジオのようなものがほとんどで、その他は書籍となるだろう。歴史という分野でいえば学校での授業もある。しかし、それらは極端な言い方をすればあくまでも情報の発信者から受信者への一方的な情報の伝達である。受信者は基本的にもらいた情報によって歴史を判断せざるをえず、たとえ疑問を抱いたとしてもそれを調べる人は少数であるし、さらに調べた結果を社会に反映させることができる人はさらに少数である。また、そのような中で情報の双方向のやり取りを可能にするのは手紙や電話となるが、それらはあくまでも特定の個人の間での情報の交換に使われるために社会へ反映させる手段としては不適切である。それに対してインターネットでは情報の双方向のやり取りを可能にし、さらにインターネットができる環境であれば基本的にだれでも情報を共有するこ

とも情報を発信することもできる。現在の状況はマス・メディアや学校の授業といった特定の情報源にインターネット上の不特定多数の個人という情報源が加わり、歴史の判断材料が増えている過程にあると考えている。

では、そのような現在の状況からこの先はどうなっていくのだろうか。現在では、これまでの歴史観とは異なる歴史観が生まれることによって、従来の歴史観と歴史修正主義的な歴史観との対立があるかのように見えるかもしれない。それが北田のいうように、「2ちゃんねる」の中で「自らを『標準』と信じて疑わない（とされる）『戦後民主主義』『左翼』『マスコミ』が標的とされ、その対抗機軸＝ロマン的対象として『ナショナリズム』『保守』が呼び出されている」（北田 2005：218）というように受け取られるのだろう。しかし、歴史解釈は1つだけではない。たとえば広島と長崎への原子爆弾の投下については日本では民間人への無差別かつ大量虐殺と放射能の影響による非人道的行為であり許されないという見解がほとんどであるが、アメリカなどではソ連が対日宣戦し極東での勢力を伸張させないようにすることや本土決戦によるアメリカ人の被害を未然に防ぎ早期講和を行うためにはしかたなかったという意見があるのに加え、そもそも当時は放射能の影響も完全に解明されておらず一般に認知されているものでもなかった、という見解も存在する。このように、広島と長崎に原子爆弾が投下されたという事実は1つであるがその解釈は複数存在する。また、それは今回の分析においても、「本人の歴史観」に影響を及ぼす要因を挙げてみても「インターネット掲示板（分）」や「改訂版 UCLA 孤独感得点」のようにプラスの相関関係を持っているものとともに、「[本人の歴史観に影響]学校での授業」のようにマイナスの相関関係を持っているものも強い影響力を持っていることから歴史解釈が一元ではないということの証拠になるだろう。しかし、それが日本とアメリカというようにそもそも国家が違うのであればそれほど問題にはならないかもしれない。

ここで問題なのは日本人という1つの枠組みの中で異なる歴史解釈があるということだろう。同じ歴史を共有することで日本人としての自覚を得る、つまりナショナリズムを得ることができるからである。

しかし、共通の歴史が日本人としてのアイデンティティとなり、また国民の大多数によって歴史が日本人としてのナショナリズムを高める有効な手段としてみなされれば歴史の解釈は一応のまとまりを見せていくはずである。従来の歴史観に再び収まるか、あるいは歴史修正主義的な歴史観を採用するのかはまだわからない。ただし、現在はインターネットで双方向の情報のやり取りを行っている人はまだ少ないものの、拡大していけばさらに歴史修正主義的な歴史観がより広まってく可能性は高いと考えている。また、それが直ちに教育の現場に反映されるということはないと考えられる。それは現在の教育方針を決めている世代は今回調査した世代よりもずっと年齢的に上であり、歴史修正主義的な歴史観はまだ主流ではないと考えられるからである。

5.2. 今後の課題

今回の分析での問題といえるのは調査対象が非常に範囲の限られた集団であるということがいえる。全数調査であり、任意の質問によって効果的に調査ができるとはいえ、山形大学の1つの学科を対象に行ったものであり、それが若者全体の状況を表せるものであるということは必ずしも言えない。たとえば同じ年齢層によっても、学歴や職業、収入などによって影響を受けることが考えられる。歴史への興味関心、あるいはインターネットを利用できる環境にあるかないかということなどである。ただし、これについては調査の主要目的がインターネットによる不特定多数との双方向の情報のやりとりが歴史観に与える影響についてということと、歴史修正主義的な歴史観を持っているとマス・メディアの主張する歴史観との乖離があるかどうかということであり、調査に必要な要素はほとんど用意できたのでそれほど問題視せずともいいかもしれない。

しかし、現在高揚しているといわれるナショナリズムの全体像を把握するというより大きな視点で分析するには力不足である。これについては同じ年代層の中での差異よりも、異なる年代層での差異を把握することが、現在のナショナリズムの全体像を把握するため、今回の分析よりもより大きな視点に立って分析するには必要なことである。また、今回の調査では、先行研究からある程度読み取ることができるとはいえ本当にナショナリズムが若者の間で高揚しているのかという根本的な問題もやはり異なる世代間で比べる必要があるだろう。

今後の課題としては、調査対象をさらに拡大し、より広い視野で現在のナショナリズムの全体像を調べるということになるだろう。今後ナショナリズムがどのように変遷し私たちの社会に影響を及ぼすのかを考察するために必要なことでもある。

第5章 まとめと今後の課題

付録

調査票

本論文で分析した調査の調査票は以下のとおりである。

なお、体裁やページレイアウトは原票とは異なる。

生活総合学科 1 年生～3 年生のみなさまへ

情報通信技術の利用と意識についての学術調査

調査実施責任者：生活情報システムコース 金井雅之

◆ 調査の趣旨と目的について

近年の情報通信技術の発達は、人びとの意識や社会のあり方を大きく変えつつあります。この調査は、若年層に焦点を絞ったうえで、“情報通信技術の利用と社会問題等に関する意識との関係”を明らかにすることをおもな目的としています。対象は、生活総合学科に在籍するすべての学生（1 年生～3 年生）です。

この調査は、生活情報システムコースの発展科目「社会システムの数理分析演習」の一環としておこなわれています。この科目は、「社会調査士」資格を取得するために必要な科目の 1 つ（G 科目）として認定されている、社会調査の実習をおこなう科目です。

貴重な授業時間をいただくこととなりますが、上記の趣旨をご理解の上、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

◆ 回答について

- ・ 無記名（匿名）でお答えください。
- ・ いただいた回答は、『はい』が 70%、『いいえ』が 30%』といった集計結果のみを利用します。個人が特定されるような分析はおこないません。
- ・ ほとんどの場合、あなたのお考えにもっとも近いものを 1 つ選んで「○」をつけていただきます。

例

| | |
|----|----|
| ① | 2 |
| ある | ない |

| | |
|----|----|
| ある | ない |
| 1 | ② |

◆ 回収について

- ・この授業時間内に回答の上、授業担当教員に提出してください。
- ・調査票は、個人情報保護法にしたがって厳重に管理します。入力を終えたら廃棄します。

インターネットやテレビの利用について伺います

問1 あなたは mixi などの SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）をどれくらい前から利用していますか（○は 1 つだけ）。

| | | | | | | |
|---------------|--------|----------------|---------------|-----------------|-----------------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 利用した ことがない | 3 ヶ月未満 | 3 ヶ月以上 半年未満 | 半年以上 1 年未満 | 1 年以上 1 年半未満 | 1 年半以上 2 年未満 | 2 年以上 |

問2 以下のサイトやサービスを、現在 1 日あたり平均してどれくらい利用しますか（携帯電話などからの利用を含みます）。

| | | | | |
|------------------------|--|----|--|---|
| ア) ニュースサイト（閲覧） | | 時間 | | 分 |
| イ) 個人の Web ページ（閲覧や作成） | | 時間 | | 分 |
| ウ) 掲示板や口コミサイト（閲覧や書き込み） | | 時間 | | 分 |
| エ) チャット | | 時間 | | 分 |
| オ) ブログ（閲覧や作成や書き込み） | | 時間 | | 分 |
| カ) SNS | | 時間 | | 分 |

問3 あなたはインターネットの以下の情報源から得られる情報をどの程度信頼していますか。

| | とても信頼している | 少し信頼している | あまり信頼していない | まったく信頼していない |
|------------------|-----------|----------|------------|-------------|
| ア) ニュースサイト | 1 | 2 | 3 | 4 |
| イ) 個人のWeb ページ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ウ) 掲示板や口コミサイト | 1 | 2 | 3 | 4 |
| エ) ブログ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| オ) オンラインアンケートの結果 | 1 | 2 | 3 | 4 |

問4 あなたはテレビを、1日あたり平均してどれくらい視聴しますか。また、そのうちニュースなどの報道番組（ワイドショーを除く）はどれくらい視聴しますか。

テレビ全体 約 時間 分

うち報道番組 約 時間 分

日頃の意識や意見について伺います

問5 1 から 20 までの文章に述べられているそれぞれのことがらを、日頃あなたはどれくらい感じていますか。

| | 感じない | けっこう感じない | どちらかといえば | 感じる | たびたび感じる |
|---------------------------|------|----------|----------|-----|---------|
| 1. 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている。 | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| 2. 私は、人とのつきあいがいい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | |

| | | | | |
|----------------------------------|---|---|---|---|
| 3. 私には、頼りにできる人がだれもない。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 私は、ひとりぼっちではない。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5. 私は、親しい仲間たちのなかで欠くことのできない存在である。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6. 私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7. 私は、今、だれとも親しくしていない。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8. 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9. 私は、外出好きの人間である。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10. 私には、親密感の持てる人たちがいる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11. 私は、無視されている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12. 私の社会的なつながりはうわべだけのものである。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13. 私をよく知っている人はだれもない。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14. 私は、他の人たちから孤立している。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15. 私は、望むときにはいつでも、人とつきあうことができる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16. 私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 17. 私は、たいへん引っ込み思案なのでみじめである。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18. 私には、知人はいるが、私と同じ考えの人はいない。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19. 私には、話しかけることのできる人たちがいる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20. 私には、頼りにできる人たちがいる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

問6 以下の各文について、あなたの考えにあてはまるところに○をつけてください。

| | 反対 | 反対 | どちらかといえば | どちらでもない | 賛成 | どちらかといえば | 賛成 |
|---------------------------------------|----|----|----------|---------|----|----------|----|
| 1. 物価の安い外国に暮らすのもいいが、少々高くついても日本に暮らしたい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 2. 生まれ変わるとしたら、また日本人に生まれたい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 私は日本という国が好きだ。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 私は日本人であることを誇りに思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 治安の良さから考えて、他の国には住みたくない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 日本にはあまり愛着を持っていない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 日本は世界で一番良い国である。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 日本の経済力を考えれば、国連や国際会議における日本の発言力はもっと大きくあるべきだ。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9. 世界の貧しい国の生活水準をあげるために、私たちの生活水準を下げる気にはならない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10. 日本人は世界でもっとも優れた民族のひとつである。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 11. アジアの将来を決定する上で、日本は最大の発言力を持つべきである。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 12. 日本が戦後に驚異的な成長を遂げたのは、国民の優秀性による。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 13. 海外援助をするなら日本の不利益になるような援助はすべきでない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

問7 あなたは、以下の歴史上のできごとに対して、日本にはどの程度の責任があったと思いますか。あてはまるところに○をつけてください。

| | 非常に責任がある | 少し責任がある | どちらともいえない | あまり責任はない | ほとんど責任はない | そのできごとをよく知らないの で判断でき ない |
|----------|----------|---------|-----------|----------|-----------|-------------------------------|
| 1. 朝鮮併合 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 2. 創氏改名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 3. 満州事変 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 4. 南京虐殺 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 5. 真珠湾攻撃 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |

| | | | | | | |
|--------------|---|---|---|---|---|---|
| 6. 東南アジアへの侵攻 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7. 強制連行 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 8. 従軍慰安婦 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |

問8 問7で答えたあなたの考え方に、全体として影響を与えたと思うのは、つぎのうちどれですか（〇はいくつでも）。

| | | | |
|----|-----|-----------|-------------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 新聞 | テレビ | インターネット | 学校での授業 |
| 5 | 6 | 7 | 8 |
| 家族 | 友人 | その他（具体的に） | どれにも影響を 受けていない |

問9 以下の歴史上のできごとに対して、マスコミは日本にどの程度責任があったと考えているとあなたは思いますか。あてはまるところに〇をつけてください。

| | 非常に責任がある | 少し責任がある | どちらともいえない | あまり責任はない | ほとんど責任はない | そのできごとに関するマスコミの論調を知らない |
|--------------|----------|---------|-----------|----------|-----------|------------------------|
| 1. 朝鮮併合 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 2. 創氏改名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 3. 満州事変 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 4. 南京虐殺 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 5. 真珠湾攻撃 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 6. 東南アジアへの侵攻 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7. 強制連行 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |

| | | | | | | |
|----------|---|---|---|---|---|---|
| 8. 従軍慰安婦 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|----------|---|---|---|---|---|---|

問10 問9で挙げたできごとに対するマスコミの論調は、全体として、以下の意見にどれくらい影響を受けていると思いますか。あてはまるところに○をつけてください。

| | 非常に影響を受けている | 少し影響を受けている | どちらでもない | あまり影響を受けていない | ほとんど影響を受けていない |
|--------------|-------------|------------|---------|--------------|---------------|
| 1. 日本の国内世論 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 日本政府の見解 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 日本の左翼勢力 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 日本の右翼勢力 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 外国の世論 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 外国政府の見解 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. マスコミ社内の意見 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

最後にあなた自身のことについて伺います

問11 あなたの性別をお聞かせください。

1 2
男 女

問12 あなたの学年をお聞かせください。

1 2 3
1年生 2年生 3年生

問13 あなたにとっての「地元」とはどこですか。

ウ) 弟 人 工) 妹 人

問19 現在、自分から家族に連絡を取る頻度はどれくらいですか。

| | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|--------------|------------|--------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| ほとんど 毎日 | 数日に 一回程度 | 週に 一回程度 | 月に 一回程度 | 数か月に 一回程度 | 年に 一回程度 | まったく 取らない |

問20 現在、家族から自分に来る連絡の頻度はどれくらいですか。

| | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|--------------|------------|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| ほとんど 毎日 | 数日に 一回程度 | 週に 一回程度 | 月に 一回程度 | 数か月に 一回程度 | 年に 一回程度 | まったく 来ない |

問21 あなたが中学生だった頃、家族そろって夕食をとることはどれくらいありましたか。

| | | | | |
|------------|------------|------------|------------|-----------------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ほとんど 毎日 | 週に 5～6日 | 週に 3～4日 | 週に 1～2日 | 家族がそろうことは ほとんどなかった |

問22 あなたが小学生だった頃、休日に家族と一緒に外出することはどれくらいありましたか。

| | | | |
|-------|---------|---------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よくあった | ときどきあった | あまりなかった | ほとんどなかった |

問23 あなたは将来どの地域で働こうと思っていますか。もっとも希望している地域を1つだけ選んでください。

| | | | |
|--------|----|---------------|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 北海道 | 東北 | 関東（東京、神奈川、千葉） | 関東（3以外の県） |
| 5 | 6 | 7 | 8 |
| 東海・北信越 | 近畿 | 中国・四国・九州 | 海外 |

問24 問23で答えた地域の中で具体的な都道府県名があれば書いてください。

都道府県名
(国名)

問25 問23や問24で答えた場所で働きたいと思うのはなぜですか (〇はいくつでも)。

- | | | | |
|-------------|--------------|-----------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 友人が多いから | 家族や親類縁者がいるから | 実家があるから | その土地が好きだから |
| 5 | 6 | 7 | |
| 希望する職種があるから | その土地に憧れているから | その他(具体的に) | |
| | | [|] |

問26 あなたは将来どういう仕事をしたいですか (〇はいくつでも)。

- | | | | |
|---------------|-------------|-------------------|---------------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 栄養士の資格を活かした仕事 | 食品関連の企業や研究所 | 建築・インテリア関係の企業や事務所 | 情報通信関連企業(SEやプログラマー) |
| 5 | 6 | 7 | 8 |
| 公務員 | 教員 | まだ決まっていない | その他(具体的に) |
| | | | [|

これで質問は終わりです。

記入漏れがないかもう一度確認し、授業担当教員に提出してください。

ご協力ありがとうございました。

最後に、意味が分かりにくかったり答えにくかったりした質問や、回答してみたの感想やコメントがありましたら、お聞かせください。

| |
|--|
| |
| |
| |
| |
| |
| |

単純集計表

以下は本稿で使用した変数の単純集計表である。

| 問 02 ア) [利用時間 (分)] ニュースサイト | | | | |
|----------------------------|-----|----|---------|-----------|
| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
| 有効 | 0 | 74 | 33.0 | 33.0 |
| | 1 | 4 | 1.8 | 1.8 |
| | 2 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 3 | 3 | 1.3 | 1.3 |
| | 5 | 30 | 13.4 | 13.4 |
| | 10 | 47 | 21.0 | 21.0 |
| | 15 | 13 | 5.8 | 5.8 |
| | 20 | 11 | 4.9 | 4.9 |
| | 30 | 29 | 12.9 | 12.9 |
| | 40 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 60 | 8 | 3.6 | 3.6 |
| | 70 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 120 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | | 計 | 224 | 100.0 |

問 02 イ)〔利用時間（分）〕個人の Web ページ

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 0 | 98 | 43.8 | 43.8 |
| | 1 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 5 | 7 | 3.1 | 3.1 |
| | 10 | 31 | 13.8 | 13.8 |
| | 15 | 6 | 2.7 | 2.7 |
| | 20 | 10 | 4.5 | 4.5 |
| | 30 | 39 | 17.4 | 17.4 |
| | 40 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 60 | 20 | 8.9 | 8.9 |
| | 90 | 4 | 1.8 | 1.8 |
| | 120 | 6 | 2.7 | 2.7 |
| | 180 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 合計 | 224 | 100.0 | 100.0 |

問 02 ウ)〔利用時間（分）〕掲示板

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 0 | 127 | 56.7 | 56.7 |
| | 1 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 2 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 5 | 11 | 4.9 | 4.9 |
| | 10 | 24 | 10.7 | 10.7 |
| | 15 | 6 | 2.7 | 2.7 |
| | 20 | 6 | 2.7 | 2.7 |
| | 30 | 24 | 10.7 | 10.7 |
| | 60 | 16 | 7.1 | 7.1 |
| | 120 | 5 | 2.2 | 2.2 |
| | 180 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 合計 | 224 | 100.0 | 100.0 |

問 02 エ)〔利用時間（分）〕チャット

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 0 | 213 | 95.1 | 95.1 |
| | 5 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 10 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 15 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 20 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 30 | 3 | 1.3 | 1.3 |
| | 40 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 60 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 120 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 240 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 合計 | 224 | 100.0 | 100.0 |

問 02 オ)〔利用時間（分）〕ブログ

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 0 | 130 | 58.0 | 58.0 |
| | 1 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 5 | 10 | 4.5 | 4.5 |
| | 6 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 10 | 22 | 9.8 | 9.8 |
| | 15 | 10 | 4.5 | 4.5 |
| | 20 | 7 | 3.1 | 3.1 |
| | 30 | 28 | 12.5 | 12.5 |
| | 40 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 60 | 10 | 4.5 | 4.5 |
| | 90 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 120 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 240 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | | 合計 | 224 | 100.0 |

問 02 力) [利用時間 (分)] SNS

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 0 | 134 | 59.8 | 59.8 |
| | 1 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 5 | 5 | 2.2 | 2.2 |
| | 10 | 10 | 4.5 | 4.5 |
| | 15 | 4 | 1.8 | 1.8 |
| | 20 | 8 | 3.6 | 3.6 |
| | 30 | 33 | 14.7 | 14.7 |
| | 40 | 3 | 1.3 | 1.3 |
| | 50 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 60 | 13 | 5.8 | 5.8 |
| | 90 | 1 | 0.4 | 0.4 |
| | 120 | 5 | 2.2 | 2.2 |
| | 150 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 180 | 3 | 1.3 | 1.3 |
| | | 合計 | 224 | 100.0 |

問 05【集計】〔改訂版 UCLA 孤独感得点〕

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 40 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 41 | 4 | 1.8 | 1.8 |
| | 42 | 7 | 3.1 | 3.2 |
| | 43 | 9 | 4.0 | 4.1 |
| | 44 | 8 | 3.6 | 3.6 |
| | 45 | 24 | 10.7 | 10.9 |
| | 46 | 27 | 12.1 | 12.2 |
| | 47 | 29 | 12.9 | 13.1 |
| | 48 | 22 | 9.8 | 10.0 |
| | 49 | 23 | 10.3 | 10.4 |
| | 50 | 28 | 12.5 | 12.7 |
| | 51 | 14 | 6.3 | 6.3 |
| | 52 | 8 | 3.6 | 3.6 |
| | 53 | 7 | 3.1 | 3.2 |
| | 54 | 5 | 2.2 | 2.3 |
| | 55 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 56 | 3 | 1.3 | 1.4 |
| | 59 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | | 合計 | 221 | 98.7 |
| 欠損値 | | 3 | 1.3 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

近年の若年層におけるナショナリズムの高揚（関明愛）

問 06_a 【集計】〔国民意識尺度〕 愛国心

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 15 | 4 | 1.8 | 1.8 |
| | 16 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 17 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 18 | 5 | 2.2 | 2.3 |
| | 19 | 14 | 6.3 | 6.3 |
| | 20 | 11 | 4.9 | 5.0 |
| | 21 | 19 | 8.5 | 8.6 |
| | 22 | 25 | 11.2 | 11.3 |
| | 23 | 26 | 11.6 | 11.7 |
| | 24 | 26 | 11.6 | 11.7 |
| | 25 | 23 | 10.3 | 10.4 |
| | 26 | 19 | 8.5 | 8.6 |
| | 27 | 19 | 8.5 | 8.6 |
| | 28 | 11 | 4.9 | 5.0 |
| | 29 | 7 | 3.1 | 3.2 |
| | 30 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 31 | 7 | 3.1 | 3.2 |
| | 合計 | 222 | 99.1 | 100.0 |
| 欠損値 | | 2 | 0.9 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 06_b【集計】〔国民意識尺度〕 国家主義

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 7 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 9 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 10 | 4 | 1.8 | 1.8 |
| | 11 | 3 | 1.3 | 1.4 |
| | 12 | 4 | 1.8 | 1.8 |
| | 13 | 11 | 4.9 | 5.0 |
| | 14 | 16 | 7.1 | 7.2 |
| | 15 | 14 | 6.3 | 6.3 |
| | 16 | 22 | 9.8 | 9.9 |
| | 17 | 23 | 10.3 | 10.4 |
| | 18 | 39 | 17.4 | 17.6 |
| | 19 | 26 | 11.6 | 11.7 |
| | 20 | 12 | 5.4 | 5.4 |
| | 21 | 16 | 7.1 | 7.2 |
| | 22 | 9 | 4.0 | 4.1 |
| | 23 | 7 | 3.1 | 3.2 |
| | 24 | 6 | 2.7 | 2.7 |
| | 25 | 3 | 1.3 | 1.4 |
| | 27 | 2 | 0.9 | 0.9 |
| | 28 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| 30 | 1 | 0.4 | 0.5 | |
| | 合計 | 222 | 99.1 | 100.0 |
| 欠損値 | | 2 | 0.9 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 07【集計】〔本人の歴史観〕 平均

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|------|----|---------|-----------|
| 有効 | 1.00 | 46 | 20.5 | 23.0 |
| | 1.13 | 5 | 2.2 | 2.5 |
| | 1.14 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 1.17 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 1.20 | 6 | 2.7 | 3.0 |
| | 1.25 | 11 | 4.9 | 5.5 |
| | 1.29 | 7 | 3.1 | 3.5 |
| | 1.33 | 5 | 2.2 | 2.5 |
| | 1.38 | 5 | 2.2 | 2.5 |
| | 1.40 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| | 1.43 | 4 | 1.8 | 2.0 |
| | 1.50 | 12 | 5.4 | 6.0 |
| | 1.57 | 2 | 0.9 | 1.0 |
| | 1.60 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| | 1.63 | 6 | 2.7 | 3.0 |
| | 1.67 | 5 | 2.2 | 2.5 |
| | 1.71 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| | 1.75 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 1.80 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| | 1.83 | 2 | 0.9 | 1.0 |
| | 1.86 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| | 1.88 | 6 | 2.7 | 3.0 |
| | 2.00 | 14 | 6.3 | 7.0 |
| | 2.13 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 2.14 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 2.17 | 2 | 0.9 | 1.0 |
| | 2.20 | 2 | 0.9 | 1.0 |
| | 2.25 | 4 | 1.8 | 2.0 |
| | 2.29 | 4 | 1.8 | 2.0 |
| | 2.33 | 4 | 1.8 | 2.0 |
| | 2.50 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| | 2.57 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 2.60 | 1 | 0.4 | 0.5 |

| | | | |
|------|-----|-------|-------|
| 2.67 | 2 | 0.9 | 1.0 |
| 2.75 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| 2.80 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| 2.86 | 2 | 0.9 | 1.0 |
| 2.88 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| 3.00 | 7 | 3.1 | 3.5 |
| 3.38 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| 3.63 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| 4.00 | 3 | 1.3 | 1.5 |
| 4.50 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| 5.00 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| 合計 | 200 | 89.3 | 100.0 |
| 欠損値 | 24 | 10.7 | |
| 合計 | 224 | 100.0 | |

問 08_1 [本人の歴史観に影響] 新聞

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 162 | 72.3 | 73.6 |
| | 選択 | 58 | 25.9 | 26.4 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 08_2 [本人の歴史観に影響] テレビ

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 85 | 37.9 | 38.6 |
| | 選択 | 135 | 60.3 | 61.4 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 08_3〔本人の歴史観に影響〕 インターネット

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 196 | 87.5 | 89.1 |
| | 選択 | 24 | 10.7 | 10.9 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 08_4〔本人の歴史観に影響〕 学校での授業

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 55 | 24.6 | 25.0 |
| | 選択 | 165 | 73.7 | 75.0 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 08_5〔本人の歴史観に影響〕 家族

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 187 | 83.5 | 85.0 |
| | 選択 | 33 | 14.7 | 15.0 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 08_6〔本人の歴史観に影響〕 友人

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 213 | 95.1 | 96.8 |
| | 選択 | 7 | 3.1 | 3.2 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 08_7 [本人の歴史観に影響] その他

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 197 | 87.9 | 89.5 |
| | 選択 | 23 | 10.3 | 10.5 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 08_8 [本人の歴史観に影響] どれにも影響を受けていない

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|-----|-----|-----|---------|-----------|
| 有効 | 非選択 | 202 | 90.2 | 91.8 |
| | 選択 | 17 | 7.6 | 7.7 |
| | 4 | 1 | 0.4 | 0.5 |
| | 合計 | 220 | 98.2 | 100.0 |
| 欠損値 | 無回答 | 4 | 1.8 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 09【集計】〔マスコミの歴史観〕平均

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|------|----|---------|-----------|
| 有効 | 1.00 | 21 | 9.4 | 13.9 |
| | 1.13 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 1.14 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.17 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 1.20 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.25 | 5 | 2.2 | 3.3 |
| | 1.29 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.33 | 4 | 1.8 | 2.6 |
| | 1.40 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.43 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 1.50 | 3 | 1.3 | 2.0 |
| | 1.57 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 1.60 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 1.63 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.67 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.71 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 1.75 | 3 | 1.3 | 2.0 |
| | 1.83 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.86 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 1.88 | 3 | 1.3 | 2.0 |
| | 2.00 | 31 | 13.8 | 20.5 |
| | 2.13 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 2.14 | 4 | 1.8 | 2.6 |
| | 2.17 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 2.25 | 3 | 1.3 | 2.0 |
| | 2.29 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 2.38 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 2.40 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 2.43 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 2.50 | 8 | 3.6 | 5.3 |
| | 2.63 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 2.67 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 2.75 | 2 | 0.9 | 1.3 |

付録

| | | | | |
|-----|------|-----|-------|-------|
| | 2.88 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 3.00 | 16 | 7.1 | 10.6 |
| | 3.13 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 3.25 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 3.67 | 2 | 0.9 | 1.3 |
| | 3.75 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 4.00 | 6 | 2.7 | 4.0 |
| | 4.17 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 4.38 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 4.75 | 1 | 0.4 | 0.7 |
| | 合計 | 151 | 67.4 | 100.0 |
| 欠損値 | | 73 | 32.6 | |
| 合計 | | 224 | 100.0 | |

問 11 〔性別〕

| | | 度数 | 相対度数(%) | 有効相対度数(%) |
|----|---|-----|---------|-----------|
| 有効 | 女 | 171 | 76.3 | 76.3 |
| | 男 | 53 | 23.7 | 23.7 |
| 合計 | | 224 | 100.0 | 100.0 |

文献

- 浅羽道明, 2004, 『ナショナリズム——名著でたどる日本思想史入門』筑摩書房.
- 阿部潔, 2001, 『彷徨えるナショナリズム』世界思想社.
- Anderson Benedict, 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London and New York Verso, Revised Edition. (=1997, 白石さや・白石隆訳, 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』, NTT 出版.)
- Wallerstein Immanuel, 1983, *Historical Capitalism*, Verso. (=1985, 川北穰訳, 『史的システムとしての資本主義』, 岩波書店.)
- 小熊英二, 2002, 『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
- 小熊英二・小野陽子, 2003, 『〈癒し〉のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶応義塾大学出版会.
- 金子勝・高橋哲哉・山本二郎, 2001, 『グローバリゼーションと戦争責任』岩波書店.
- 唐沢穰, 1994, 「日本人の国民意識の構造とその影響」 『日本社会心理学会第 35 回大会発表論文集』.
- 姜尚中, 2001, 『ナショナリズム』岩波書店.
- 北田暁大, 2005, 『嗤う日本のナショナリズム』日本放送出版教会.
- Gellner Ernest, 1983, *Nations and Nationalism*, Cornell University Press. (=2000, 加藤節訳, 『民族とナショナリズム』岩波書店.)
- 後藤道夫, 2004, 『岐路に立つ日本』吉川弘文館.
- 小林よしのり, 1998, 『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL——戦争論』幻冬舎.
- 小林よしのり, 2000, 『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL——台湾論』小学館.
- 小林よしのり, 2003, 『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL——戦争論 3』幻冬舎.
- 鈴木謙介, 2005, 「若者は『右傾化』しているか——左派の歪んだ写し姿（特集 反日運動——私たちは何に直面しているか）」『世界』(No.714): 154-62.
- 高橋哲哉, 2004, 『教育と国家』講談社.
- 高原基彰, 2006, 『不安型ナショナリズムの時代——日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由』洋泉社.
- 高橋善哉, 1998, 『高橋善哉著作集 第四巻——現代日本の考察』こぶし書房.
- 葉室真郷・柳津弘, 1983, 『現代日本のナショナリズム』こぶし書房.
- McLuhan Marshall, 1986, *Understanding Media : The Extensions of Man*, McGraw-Hill. (=1987, 栗原裕・河本仲聖訳, 『メディア論——人間の拡張の諸相』, みずほ書房.)

文献

- 安丸良夫, 2005, 「歴史教科書 肥大化するナショナリズム史観——扶桑社版『新しい歴史教科書』を読む」『世界』(No.704): 45-52.
- 山野車輪, 2005, 『マンガ嫌韓流』晋遊舎.
- 山野車輪, 2006, 『マンガ嫌韓流 2』晋遊舎.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版局.
- 渡辺治, 2006, 「現代日本におけるナショナリズムの台頭 (特集:現代帝国主義とナショナリズムの台頭)」『日本の科学者』41(3): 128-33.